

一般国道 23 号中勢道路（10 工区）建設事業に伴う
蔵田遺跡（第4次）発掘調査報告

2008（平成20）年2月

三重県埋蔵文化財センター

月

三重県津市は、平成18年の内町村合併により、10内町村を合併せた
広大な面積を持つことになりました。その中でも、津市域は、新市の
内核となるべき津域で、安濃川や岩川といった河川によって奇まれ
た河積の野に多くの遺跡が残っている津域であります。

今後報告します津の遺跡では、過去にも、伊勢道23号の夢道路の史
事に先駆けて発掘調査が行われており、李三郎代・お猿時代の集落や
生糸流路、それに伴う護岸等が見つかっています。今後の調査も、
この夢道路の史事に先駆けて行ったもので、過去の調査と連結する遺構
等が見つかりました。

これらの豊饒や財は、記録保存というかたちになりましたが、事
事によって認めた多くの成果は、津市域が今までより発展していた真
実を伝えています。このような豊饒が、現代に生きる人々、またこれ
から人々を背負う子供たちに広く認知・活用され、津域を育てる財
産になり、やがて豊かな藍藻ある津城の創造に役立つことを切望する
次第です。

最後に、事事にあたっては、豊とを通すや津市教育委員会をはじめ、
津市の人々から多くの御協力とともに深かい御配慮を頂くことができ
ました。やまとはなりましたが、心からの御厚い御礼を申し上げます。

2008年2月

三重県豊饒や財センター

所長 吉水 康夫

例　　言

- 1 さきは、三重県津市船町字蔵²に所在する蔵²道跡(第4矢)発掘調査にかかる報告書である。
- 2 さきがいう発掘調査の原³は、一ノ郷道23号⁴夢道路発⁵跡である。
- 3 蔵²道跡の調査は、三重県教育委員会が実施する部門の実事務（主担当。現職⁶を除く部門の整備員）から委託を受け、平成11年度に実施した。調査費用は、実事務の部門の実事務の全額負担による。
- 4 発掘調査の各辯は以下のことおりである。
調査主任：三重県教育委員会
調査担当：三重県立蔵²文化センター
現場作業：むき抜⁷部実事務
- 5 現地調査の担当は以下のことおりである。
三重県立蔵²文化センター　調査第二課第三係
主査(現地教育委員会より派遣)　土屋一裕　調査補助員　小林尚之
- 6 実報告書の作成業務は、三重県立蔵²文化センターで実施し、調査印を二枚が付くものに行った。進橋と退橋の写真撮影は土屋⁸が行った。報告書での紹介は、第V章(史料学分析)はパリノ・サーヴェイ株式会社が行い、それ以外は小林⁹が行い、全体の編集は小林⁹が行った。また、報告書の分担は土屋⁸および小林⁹にも記した。
- 7 までの作成業務は内川麻子、黒川弘子、木戸治子、森川訥代、三谷沙、鶴¹⁰やよい、新井智子、倉¹¹り起子、佐藤昌代子、土屋香代、丸山隼¹²公司が担当した。また、調査補助員として、私暦作業が整理工事に携わった。
- 8 現地の調査および報告書の作成にあたっては、以下の人々から有益な御教示を受けた。(敬称略)
木下哲哉(三重大学)
- 9 蔵²道跡(第4矢)については、すでに『一ノ郷道23号⁴夢道路発⁵跡発掘調査報告』XII(三重県立蔵²文化センター、2000年)に、その調査途¹³の概要を報告¹⁴しているが、さきをもって二式報告¹⁵とする。
- 10 真¹⁶発掘調査の記録および目次は、三重県立蔵²文化センターで保管している。

附 錄

<注釈項>

- 1 条文で使用した用語は、当該用語が発行の1:25,000地図上、津市都内計画1:1,000である。
- 2 これらの用語は、当該用語が発行用語を除き、当該用語のりと津市による地図第VI系(四條ノ地図)で示されているものであるため、平成14年4月から施行されている世界津市・津市城戸2000(1 TRF, GRS-80)には記載していない。
- 3 用語のうちにはすべて地図上に示している。

<道橋類>

- 4 三層では、層の空きを実質で、車両を運搬および軽微荷物に担当する部分を一点領域で表現している。また、道橋や橋のトネルとなる層については、この二層よりも多い段で表現した。
- 5 三層での仕事は、小川正志・竹原秀輔著『新版標準三層』(23版、三重県立農業株式会社を1967年)を基準とした仕事と表現した。
- 6 三輪者での道橋番号は、県営農業センター車両の蔵道番号1~3次車両からの連番となっている。
- 7 道橋等の斯号で、車両の担当者番号に久留があるものは、久留となっている。
- 8 道橋番号の頭には、見た目の性格によって、以降の略番号を付けている。

SD: 滑 S K: 三重 SR: 津道・半燃油路
SZ: 梱卸・その他の不明道橋 P: ピット・栓穴

<道橋類>

- 9 三輪者での道橋番号は実際の1/4を基準としている。それ以外の縮尺のものについては、そのまま倍数増加している。
- 10 道橋実譜では、道橋・車両次数等でそれぞれまとめており、全員として道橋ではない。
- 11 道橋実譜では、以降の表頭で記載している。
報告番号·····三輪者での車両番号である。
橋樋番号·····『一場所道23号半燃油路沿蔵で三輪者用津市橋樋』XIIで報告された道橋番号を示す。
実譜番号·····実譜実習の登録番号である。
列額·····道橋の種類を示す。
留置若·····道橋の留置を示す。
グリッド·····車両時に満定した4mの車両の位置を示す。
目三郎番·····目三郎した道橋や橋の番号を示す。
法号(cm)·····道橋の法号を示す。(上)は上部部番、(底)は底部部番、(端)は端さを示す。
津壁・坂筋の始点···さな坂筋を表示。(上)・(下)・(左)・(右)で示した。
用事·····小車若の沿用性を除いた系津の紙密を「密~煙」で示した。
坑成·····見・見出で示した。
仕事·····その道橋の代表となる仕事と記載した。手記は、前掲『新版標準三層』に記載。
残存·····道橋の残存度を示した。
崩壊·····その他の道橋の崩壊となる項目を記載した。

<写真版>

- 12 用語と写真版の道橋番号は、それぞれの道橋の実譜番号と対応している。
- 13 道橋の写真版は、船に斯らない張り船にてである。

本文目次

I	前言	(小林)	1
1	① 勢道路と謀叛で併せて保護	1	
2	謀叛の性質	1	
3	謀叛の経過	4	
4	謀叛の方法	4	
5	整理作成の方法	5	
II	危機と環境	(小林)	6
1	地理的環境	6	
2	戦後退歩の進みの謀叛成災	6	
3	周辺の進歩	6	
III	脅迫と退却	(小林)	10
1	基本脅迫	10	
2	飞脅の退却	10	
3	學生時代の退却	13	
4	在学時代の退却	17	
5	略期未明の退却	19	
IV	EBC 退却	(小林)	21
1	飞脅退却のEBC 退却	21	
2	學生時代のEBC 退却	21	
3	在学時代のEBC 退却	21	
4	その他のEBC 退却	22	
5	包含脅迫EBC 退却	22	
V	自然科学分析		33
1	分析的目的	(小林)	33
2	二論分析	(パリノ・サーヴェイ株式会社 予藤記行 金井慎司)	33
3	本邦の海陸衛定	(パリノ・サーヴェイ株式会社 重橋 駿)	34
VI	謀叛のまとめと考察	(小林)	38
1	誤認された退却	38	
2	學生時代以後の傾向	38	

挿 図 目 次

第1号	④ 勝道路(8・9・10回)歩道跡記号	2
第2号	調査記号	3
第3号	小地図(グリッド)記号	3
第4号	戦・進歩道構造、構形頭尾記号	7
第5号	戦・進歩道記の進歩	8
第6号	調査記号	11
第7号	△ 背面記号	11
第8号	道構り記号、△ 背面構略記号	12
第9号	SR12・13、進歩群、SD41記号	13
第10号	SK17・18・19記号、断面記号	14
第11号	SD4記号、△ 背面記号、S Z11記号、断面記号	15
第12号	SD40記号、△ 背面記号	16
第13号	SR1記号、断面記号	16
第14号	SR4記号、△ 背面記号	18
第15号	SK20記号、断面記号	19
第16号	SK21記号、断面記号	19
第17号	△ 進歩頭記号①	24
第18号	△ 進歩頭記号②	25
第19号	△ 進歩頭記号③	26
第20号	△ 進歩頭記号④	27
第21号	△ 進歩頭記号⑤	28
第22号	試験記号記号	33
第23号	季・時代の戦・進歩・戦・進歩月別記号	39

表 目 次

第1表	④ 勝道路(8~10回)歩道跡記号	3
第2表	戦・進歩第4次道構-聚	20
第3表	△ 進歩構察記号①	29
第4表	△ 進歩構察記号②	30
第5表	△ 進歩構察記号③	31
第6表	△ 進歩構察記号④	32
第7表	△ 求査記号全所端頭	34
第8表	勝利記号全所端頭	35

写 真 図 版 目 次

1	調査記号	43
2	S R14 [△ 背面記号△脚△脇] ; △ 背面記号△脚△脇	44
3	S R12・13、SD41全記号；進歩検討状況；	
4	進歩検討状況[左]；進歩検討状況	45
5	SK17進歩△記号；SK18進歩△記号；SK19進歩△記号	46
6	SK18空型状況；SK19空型状況	47
7	SD4△背側記号；SD4進歩△記号；SD40	48
8	S Z11; S R1	49
9	SD11・S R4・SD4△記号；SD11・S R4・SD4空型状況	50
10	△ 進歩 [△ 器]	51
11	△ 進歩 [未製品]	52
12	勝利記号本紹(1)	53
13	勝利記号本紹(2)	54
14	勝利記号本紹(3)	55
			56

I 前 言

1 中勢道路建設と埋蔵文化財保護

昭和58年4月、郡内静岡道より伊勢バイパスとして始点内之町、豊田市から松阪市小瀬町(近畿一木筋三重県・伊勢)までの33.8kmの区間が郡内静岡道に決定された。

この道路は、国道23号のバイパスで、伊勢地域の道路網を充実させるとともに、総合的な南北都市圏連絡系の構築を目的のもので、現在迄23号の東西連絡の緩和と周辺の渋滞などを緩和するためのもので、現地23号の渋滞をめざし、渋滞の緩和効果に寄与しようとするものである。

この伊勢バイパス建設計画にかかる埋蔵文化財保護については、昭和57年1月に実施者(現主)を通す。以下(略)から実施者における埋蔵文化財の有無の調査を受け、三重県教育委員会が担当となり、開発する内閣府教育委員会の協力を得て文部省を通じて昭和58年度を行った。昭和59年5月に実施者へご連絡の結果をもとに、実施者三重県教育委員会、県連絡実施課と今後の取り扱いについて協議を行なった。その結果、現状見当が不明な遺跡については事前に免査請求を行い、査定依頼を行うことになった。

実施者は、実施者三重県教育委員会から三重県が委託を受け、昭和63年度は三重県教育委員会が代理が、昭成5年度以降は三重県埋蔵文化センターが調査を担当している。

また、現状作業については調査の手順を踏んで、実施者三重県教育委員会が代理は三重県教育委員会に委託している。調査実施の手順にあたっては、実施者三重県教育委員会、三重県、実施者三重県教育委員会の三者で昭和63年4月8日付で「埋蔵文化財免査請求協定書」を締結して契約を締結した。その後、実施者がこの過誤に合わせて、実施者三重県教育委員会、三重県、実施者三重県教育委員会の三者が昭成5年10月31日付で「免査協定書(第1号)」を、昭成5年9月7日付で「免査協定書(第2号)」を、昭成10年3月31日付で「免査協定書(第3号)」を締結し、連絡実施者との調整を終った。また、昭成11年3月31日付で、改めて6・8・10・13・14の各回を対象とし

た「埋蔵文化財免査請求協定書」(昭成11年4月1日～昭成16年3月31日)を締結し、昭成11年度以降の実施を規制した。

さらに、昭成16年3月31日付で「免査協定書(第1号)」を、昭成18年3月30日付で「免査協定書(第2号)」を締結し、三重県教育委員会は終了し、昭成18年4月3日付で現状作業を含めた免査請求者が伊勢市警察署と三重県で終了され、昭成18年度以降の実施を規制している。

2 調査の体制

萬代遺跡(第4号)調査は、調査主体は三重県教育委員会、調査担当は三重県埋蔵文化センターである。調査にあたっては、「県教育委員会・内閣府教育委員会職員による実施者との確認」に基づく協定を締結して、現地教育委員会より派遣職員を借りて調査作業を行なった。

実施の調査は昭成11年度、報告書作成は昭成11・15・19年度に行なった。その合計は以下の通りである。(昭成11年度)

- 幹事第一課長 吉川勝人
- 幹事第三課長 佐藤忠之
- 校 開川 治世記
- 集 宮川 一裕(註:教育委員会から派遣)
- 調査補助員 小林勝之
- 現地取扱店 三井物語店(三井物語本店)
- 主査室里 川原義子・尾川敏子・木村治子・森川謙代・三谷栄・鴻山やよい・新井翠子・倉谷リ起子

(昭成15年度)

- 幹事調査官室Ⅱグループリーダー 新井一洋
- 幹事 三浦克巳
- 集 大曾根義・安藤昌子・柳島桂子
- 校 開川 治世記
- 調査補助員 清水益子
- 主査室里 尾川敏子・木村治子・森川謙代・



第18図 計画路(8・9・10丁目)周辺地図(1:50,000)

[原図: 滋賀県:25,000版(八日市・琵琶湖・近畿部より作成)]

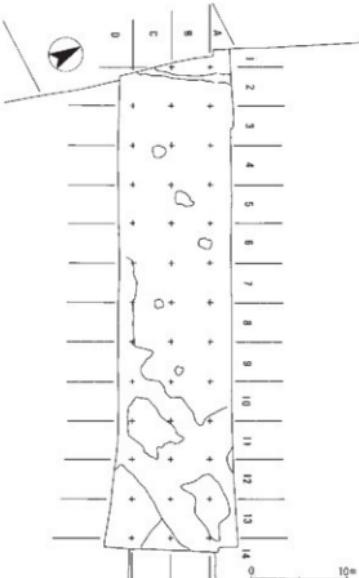
工区	遺跡名	調査対象面積												調査年度													
		範囲確認調査	本調査	昭和63	平成元	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12											
8工区	18 丸市遺跡	128	—																								
	19 山王遺跡	128	—																								
	20 内堀内遺跡	128	—																								
	21 天堤遺跡	55	—																								
	22 河崎遺跡	256	—																								
	23 六大木遺跡	448	13.220																								
	24 六大木遺跡	456	26.325	範		17.525	3,420	範3,350	1,270	670																	
	25 稲垣内遺跡	176	12.000	範	7,000	4,925	75																				
	26 大古普遺跡	680	12.435	範			5,160	範240	7,035																		
	27 新池1号墳	198	—																								
	28 新池2号墳	20	—	範																							
	29 西岡古墳	70	2.000																								
9工区	30 西岡2号墳	30	—																								
	31 山難遺跡	208	1,100	範	1,100																						
	32 門脇北古墳	0	1,100		1,100																						
	33 コウゼンジ遺跡	80	—	範																							
	34 宮ノ前遺跡	144	2.800	範	2,700																						
	35 森山東遺跡	240	5.230		1,000																						
	36 太田遺跡	469	3.320																								
	37 松ノ木遺跡	144	7.800	範	7.800																						
	65 長遺跡	0	3.700																								
	38 斎田遺跡	1,356	16.340	範																							
	39 位田遺跡	416	4.800	範																							
10工区	40 菊田遺跡	432	[10,060]	範																							
	41 武ノ坪遺跡	320	5.100	範																							
	42 里前遺跡	256	1.280	範																							
	43 梁瀬遺跡	1,152	3,620	範																							
	43 剣切1号墳	—	—	範	昭和59年津市教育委員会が実施調査																						
	43 菊切2号墳	30,517	2,249	1,880	300	461	324	1,047	96	748	1,024	678	2,010	0	8,580												
	本調査合計		247,630	7,550	20,700	22,450	8,655	8,990	8,405	15,100	18,740	15,230	8,240	4,900	4,720	4,040											

※下段の「範囲確認調査」(本調査合計)は全工区を合算した数字
※昭和平成12年度位田遺跡は津市教育委員会が実施調査

等1/2000 地形図 (1:2,500)



等1/2000 地形図 (1:2,500)



等1/200 地形図(グリッド) (1:500)

轟りやよい・宇津井起子・ウタ香代

(⁹ 戊19年度)

講評会Ⅱ講長 リサ智。

ミ 幹 上村安生

ミ か 集部義美

ミ 里 後尾ト・ミガル晴

校 師 鮎川久志子・内谷喜・内山秀治・
野瀬文沙子

臨時技術検査室・木本薰・小林海之

多生部監修 黒川承子・木谷裕子・森川綾代・

吉澤昌代子・ウタ香代・

丸山良子子・木丸千鶴・

田代敬子・小倉洋子・浜崎芭代

3 調査の経過

(1) 経過概要

今朝の講評会は、すでに講評が終了したC講評とD講評の間に休まれた内道部分である(第2回)。界所有者会が伊豆バイパス法事に伴って実施した発表講評としては第4回講評であるが、⁹ 戊3月度に「メッセウイングみえ」の発表法事に伴い、講評所有者会が発表講評を行っている⁴。本番では復興と、界所有者会の第1~3次講評の報告書⁵における評議を行い、今朝の講評は既に進歩第4次講評と呼ぶ。現地講評期間は⁶ 戊11月10月21日から⁷ 戊12月13日、講評会場は630mである。

講評会は、道路構造や現代の耕作⁸についてはず機(バックホー)により賞美し、進歩と含前の墨印ならびに進歩の検査・墨印については⁹ よりにより行った。

(2) 会話

講評の経過に関しては以下のようにある。

1999?

10月12日 各三墨印開始。

10月20日 $\frac{1}{4}$ クロス(4mメッシュ)事前。

10月21日 進歩検査開始。

10月22日 講評会発表二度目を終成。SK17進歩二度目検査写真撮影、三度目検査を終成。

10月26日 SK18・19進歩三度目検査写真撮影。

10月27日 ~11月1日 休憩。

11月4日 講評会头部の進歩検査。

11月8日 講評会头部溝跡(SR4名)の墨印開始。

11月10日 SK20完壁、写真撮影。

11月17日 進歩完壁。

11月18日 講評会全見写真撮影。

11月19日 1:20進歩四度目作成開始。

11月29日 SD41や足跡を検査。

11月30日 SD41や足跡の進歩墨印、写真撮影。

12月10日 7層確認終了。

12月13日 現場作業終了。講評終了。

(3) やすい母語会議にかかる問題点

主導権有効運営にかかる要領法令の派遣では、以降により行っている。

・やすい母語法第98条の第2項(やすい長官あて)

⑨ 戊11月10月29日 付け政令第317号(県教育長報告)

・進歩法にかかるやすい発見・認定通知(津賀奈香長あて)

⑨ 戊12月5月19日 付け政令第8-25号(県教育長通知)

4 調査の方法

(1) 洋字記入

講評にあたっては、講評会に4mの壁で¹⁰印り、¹¹メッシュ(グリッド)を書きした(第3回)。それから丸へ数字を、¹²から半アルファベットを書き、¹³メッシュを小溝跡(グリッド)名前とした。なお、¹⁴進歩の運営の講評でも小溝跡が書きされているが、今朝の小溝跡はまったく見当のもので、一致しない。したがって¹⁵三度目もやすい母語会議とともに一致しない。

(2) 進歩カード・進歩墨印

三度目では進歩カードを作成している。これは前述の小溝跡(グリッド)専用で作成するもので、進歩検査後、墨印するまで記入し、進歩の手帳関係、¹⁶三度目の食事・状態などを示してある。また、この

退場カードを基にして縮尺100分の1の略図を作成した。

(3) 退場番号

退場番号については、事前会には、僕? 退場第1～3点で使用していた壁面写真、写、三字若退場ごとの番号を確認し、1から書きした。本番では、同じく退場ごとの番号であるが、第1～3点事前の番号に引き継いで返し番号を付けた。第1～3点事前と同一の退場の場合には、同じ番号をえた。柱穴については、前述の小溝を身の返し番号をつけることとした。

(4) 現場撮影

退場の写真撮影は原則として4×5#を、補助的に6×9#・35ミリカメラを使用し、いずれもモノクロ・カラーを撮影した。使用したカメラは、WISTA4×5SP、Nikon FM2である。フィルムは、いずれの#でもKODAK T-MAX100、KODAK E100Sを使用した。

退場の写真撮影は4×5#、6×9#(モノクロ)で撮影した。使用したカメラはTOYO VIEW G IIである。使用したフィルムはいずれの#でもKODAK T-MAX100である。

(5) 退場番号

退場番号・三字若番号については縮尺20分の1書き生説を行った。退場番号の基準点は四角の直線に示している。また各退場の直線な生説が異なるものについては縮尺10分の1書き生説を行った。

5 整理作業の方法

事前で印字した番号は事前現場で取り上げ後、速やかに整理所で捺印、乾燥、複数等の1次整理が行われている。1次整理作業後、退場の選択作業を行い、退場番号を行った。生説が完成した退場は、報道番号のためのレイアウトを作成し、報道番号欄に退場整理簿に保管している。退場番号を行わなかったものは、既に退場ごと、とき崩若はグリッドごとにまとめ、退場整理簿に番号を記し、保管・管理作業を進めている。

大製品については、現地現場で取り上げ後、速やかに整理所で捺印し、干して保管し、生説が付いたものは生説を行った。写真撮影者を除ませた後、保管作業を進めた。

現地撮影に関する整理類は、写生(ヨウセ・三字若番号など)、退場カード、事前会、写真類などがある。また、整理番号で作成された退場番号、退場写真などがある。これらは所定の番号を付け、監査センターにて保管している。

また、リフレクタ分析結果についても、各様の記録として保管している。

(小林清之)

【註】

- ①井山政秀著「三・五音楽振興センター『魔女アリス』監修脚本解説」(魔女アリス・魔女アリス・魔女アリス) (1993年)。
- ②三・五音楽振興センター「魔女アリス監修脚本解説」(1999年)。

II 位置と環境

1 地理的環境

萬^{アシカ}進歩(1)は津山鉄所^{アシカ}宇萬^{アシカ}ほかに所在する。進歩の河^{アシカ}部を流れる安風川によって形成された河^{アシカ}積^{アシカ}の河^{アシカ}底を岸に位置し、標高は6.9~7.2m前後である。

周辺の地形を見ると、至進歩周辺は河^{アシカ}底になつておらず、谷^{アシカ}底になる部分には、河^{アシカ}底陥落等の遺構が検出されている²⁾。

2 蔵田遺跡の過去の調査成果

萬^{アシカ}進歩では、これまでに計4ヶ(県3ヶ、津山1ヶ)の発掘調査が行われている³⁾。調査の結果からは、季^{アシカ}三時代から洪倉時代までの遺跡であることが判明している。また、遺構はないものの、鐵^{アシカ}器も出土している。当即時に、確^{アシカ}にまとめておく。

繩文時代 銅^{アシカ}器は河^{アシカ}底陥落層から出土しており、其^{アシカ}頭から実証である。また遺構は河^{アシカ}底陥落層で灰褐色陶器砂層が確認されており、実証時に多量層が形成されてきたことが確認されている。

弥生時代 カ形盾溝茎1本、二重10本、筒5枚、バリ弾などが検出されている。

遺構は、カ形盾溝茎をリムとした河^{アシカ}底の堆土に二重^{アシカ}が検出されている。また、津山呂古瀬^{アシカ}では、バリ弾や巴拉^{アシカ}で其^{アシカ}な層が出土している。これらの遺構は、其^{アシカ}頭がトリのもので、其^{アシカ}頭へ傍即^{アシカ}頭とできるものもある。なお、この時代の堆土は柱^{アシカ}溝^{アシカ}が複数観察^{アシカ}されているが、溝^{アシカ}の馬^{アシカ}頭^{アシカ}が柱^{アシカ}の上に遺構によるものでないため、再検討の必要があろう。

二重^{アシカ}では、S XIやSK I、SF I^{アシカ}のものが、其^{アシカ}頭部の丸^{アシカ}な一様^{アシカ}である。

古墳時代 ガ^{アシカ}ト1本、二重5本、筒・多連溝茎等20枚以上、墨^{アシカ}柱^{アシカ}溝^{アシカ}数域などが検出されている。

遺構は其^{アシカ}頭へ傍即^{アシカ}頭のものが多く、E^{アシカ}底^{アシカ}でのみ単即^{アシカ}頭の遺構・遺物が見つかっている。遺構のありかたや地形的なことを考えると、墓^{アシカ}は調査^{アシカ}の先端に

立がっているものと考えられている。また、津山呂古瀬^{アシカ}では、洪路^{アシカ}で其^{アシカ}な層が検出^{アシカ}されている。このほか、柱^{アシカ}溝^{アシカ}等^{アシカ}をえられる遺構が多数検出^{アシカ}されており、注^{アシカ}される。

進歩では、其^{アシカ}な須彌器^{アシカ}等^{アシカ}のほか^{アシカ}、柱^{アシカ}溝^{アシカ}等^{アシカ}が出土^{アシカ}できる。

飛鳥・奈良時代 ガ^{アシカ}ト1本、筒4枚に加え、墨^{アシカ}柱^{アシカ}溝^{アシカ}数域が検出^{アシカ}されている。

遺構はE^{アシカ}底^{アシカ}に集中^{アシカ}し、調査^{アシカ}を先部に集中^{アシカ}があることから、調査^{アシカ}の先端に遺構が立がるものと考えられている。

鎌倉時代 ガ^{アシカ}ト2本、二重1本、筒22枚、墨^{アシカ}柱^{アシカ}溝^{アシカ}数域がある。この中には、安^{アシカ}治代末期とされたものも含めている。

遺構は、密度は低いものの、津山呂古瀬^{アシカ}も含めてほぼ全滅に立がっている。これらの遺構や筒は、その多くをふくもので、安風川流域で行なわれた久^{アシカ}洋^{アシカ}のうちにはば合致する。特にSD29・36や津山呂古瀬^{アシカ}の筒1・2は、津流溝^{アシカ}とえられ、非常に脚^{アシカ}深い。

その他 二重^{アシカ}の遺構のほかに、其^{アシカ}頭^{アシカ}とえられる^{アシカ}の足^{アシカ}、沖^{アシカ}により沖伏^{アシカ}現象を起こして埋^{アシカ}した鐵^{アシカ}頭^{アシカ}時代実^{アシカ}頭^{アシカ}時代^{アシカ}頭^{アシカ}頭^{アシカ}の遺^{アシカ}がある。

3 周辺の遺跡

ここでは、萬^{アシカ}進歩に關わる周辺の遺跡について見ていくたい。なお、萬^{アシカ}進歩周辺の遺跡については、これまで多くの研究者^{アシカ}でさらに詳細に扱われ^{アシカ}れているため、そちらを参考されたい³⁾。

繩文時代 萬^{アシカ}進歩のすぐ^{アシカ}にある松ノ木進歩(37)では、実^{アシカ}頭^{アシカ}の洪路^{アシカ}と堅六住居^{アシカ}を確認^{アシカ}している⁴⁾。また、越所進歩(16)でも実^{アシカ}頭^{アシカ}の二重^{アシカ}が出土^{アシカ}している⁵⁾。

弥生時代 萬^{アシカ}進歩の東^{アシカ}には、三重^{アシカ}を代表する季^{アシカ}三時代遺跡の越所進歩^{アシカ}がある。越所進歩は単即^{アシカ}頭^{アシカ}から傍即^{アシカ}頭^{アシカ}まで存在^{アシカ}し、安風川^{アシカ}洪流^{アシカ}の東^{アシカ}の隻^{アシカ}

と認識されている。

ヨリ下段階部には単頭の器や木製品が出土した上井追跡(10)がある。見宮丘下段階部には丸井追跡(13)がある。下段には、萬井追跡のほか、安濃川沿いに蟹井追跡(88)があり、丘陵上に多量の堅穴籠島が検出された長追跡(14)、二種追跡(82)がある。後期には、木浦追跡(73)、高松C追跡(47)などがある。このほかアーチ窓が検出されている森山追跡(35)があり、安濃川流域には李子寺下(19)が丘陵くぼ沢が見られる。

後期では、倉谷追跡(79)で単頭器の有候査¹、後期では桑松李子寺下(19)など、丘陵上に後丘

墓が集中するようになる。

古墳時代 墓の分類として秀吉²6号墳(53)が挙げられる。ほか単頭器³として野王1号墳(7)が挙げられる。下段になると、5世紀の古墳である甲子山⁴塚(54)や全長90mの単石室古墳である山の谷⁵塚(55)などがあり、それぞれ安濃川の河浜・△浜での古墳群と言えるだろう。後期には、堅井1号墳(59)、鷺井3号墳(60)、舊卒⁶塚(56)など全長30m級の単石室古墳が見られる。また、琵琶湖としては、長谷⁷下⁸塚(63)が有名で、県⁹有数の規模を持つ。その代表と言えるアリ¹⁰塚(9)では発掘調査¹¹が行われている。

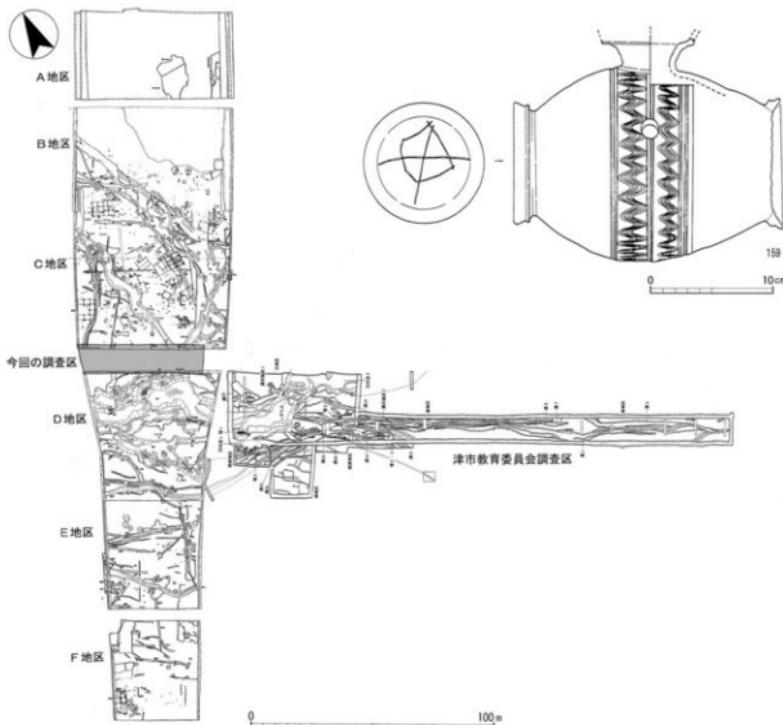


図48 猿田追跡(1:2,000)、鷺井塚⁹調査(1:4)



第5図 須磨地区の地図(1:50,000) [註: 地図は1:25,000地図を基に作成] (1:50,000地図より作成)

集落では、¹⁷ 鹿の新村追跡(75)¹⁸があるが、戸に
は書かれた追跡数が少なく、下限などところが多い。
飛鳥・奈良時代　飛鳥時代には、堅穴住居と墳
丘古墳群が検出された集落跡である¹⁹ノ前遺跡(83)²⁰
がある。ほかる奈良川沿いの橋立追跡(25)²¹、木
下追跡(81)²²で集落が、木太A追跡(80)²³では導引
跡が²⁴している。

奈良時代には、橋立追跡で堅穴古墳群がある。
木太B追跡(24)では²⁵奈良時代の社會的に配分された
墳丘群が確認されており、和銅開拓や畿内舟習若の
自己もある。これについては、²⁶波瀬百石・土箱の付
に手に「山形きぬ川郡」、裏に「久者多志郡小口
口」と書きられるものがあり、それとの関連から²⁷古
守御の特徴が指摘されている²⁸。

鎌倉時代　鎌倉時代には、いくつか集落跡が見
られ、²⁹萬³⁰追跡のほか多くの追跡で見られるよう
になる。また、³¹前遺跡(92)では、木屋の丸貝³²・茶
碗の目³³により安須津(安須津追跡群、96)からあが
った舟を引き集める集束³⁴追跡との説が³⁵えられている³⁶。

萬³⁷追跡近辺では久³⁸村についての検証も行われ
ており、安須津の久³⁹村は、舟岸藏を基準にして
之に付けて約30度東に振っているとされる。萬⁴⁰
追跡若の梵坐跡の端尾、合致することが指摘され
ている⁴¹。これら久³⁸村については「E部⁴²所難詮
伏」(ムスミモテ)のうまである⁴³。

また、元祐元年(1329)の「安須郡馬込坂法⁴⁴」⁴⁵
には、「馬力部⁴⁶」若の三歳冲の件⁴⁷が記されており、
萬⁴⁸追跡のうちある船所⁴⁹から⁵⁰河野⁵¹・岸⁵²が付
勢付⁵³の件⁵⁴になっていたことが考えられている。

(小林)

〔註〕

①三千里賀萬⁵⁵アゼンター「萬⁵⁶追跡梵坐跡⁵⁷」(1999?)。

②林山賀萬⁵⁸アゼンター「三千里賀萬⁵⁹アゼンター梵坐跡⁶⁰」⁶¹萬⁶²追跡⁶³・リリ追跡⁶⁴・ヒリ追跡⁶⁵」(1993?)。

③萬⁶⁶追跡⁶⁷。

④萬⁶⁸追跡⁶⁹アゼンター「万ノ前追跡」(萬ノ前追跡、萬⁷⁰・⁷¹追跡⁷²・ト⁷³追跡⁷⁴梵坐跡⁷⁵)⁷⁶。(1993?)など。

⑤三千里賀萬⁷⁷アゼンター「ヒノノ前追跡」(萬ノ前追跡、萬⁷⁸・⁷⁹追跡⁸⁰梵坐跡⁸¹)⁸²。(2007?)など。

⑥三千里賀萬⁸³アゼンター「鈴所追跡⁸⁴・追跡⁸⁵」(1980?)。

⑦三千里賀萬⁸⁶アゼンター「毫⁸⁷追跡」(『雪舟47』放界著者等著者表

・放界著者等⁸⁸梵坐跡⁸⁹)⁹⁰。(1973?)。

⑧三千里賀萬⁹¹アゼンター「毫⁹²追跡梵坐跡⁹³・放界著者等⁹⁴」(2007?)。

⑨三千里賀萬⁹⁵アゼンター「毫⁹⁶追跡(第5号～第8号)梵坐跡⁹⁷」(2008?)。

⑩三千里賀萬⁹⁸アゼンター「毫⁹⁹追跡梵坐跡¹⁰⁰」(2000?)。

⑪三千里賀萬¹⁰¹アゼンター「毫¹⁰²追跡」(『ふるさと追跡・毫¹⁰³追跡
夢・アゼンタ追跡梵坐跡¹⁰⁴)¹⁰⁵。(1995?)。

⑫安須津¹⁰⁶アゼンタ¹⁰⁷『木道追跡梵坐跡¹⁰⁸』(1998?)。

⑬三千里賀萬¹⁰⁹アゼンタ¹¹⁰『4号C追跡梵坐跡¹¹¹』(『けいほ
萬¹¹²アゼンタ¹¹³』F2 3, 1999?)。

⑭三千里賀萬¹¹⁴アゼンタ¹¹⁵『森¹¹⁶・久¹¹⁷追跡』(『松ノ木追跡・森¹¹⁸
・久¹¹⁹追跡・ナシ¹²⁰追跡梵坐跡¹²¹)¹²²。(1993?)。

⑮安須津¹²³アゼンタ¹²⁴『トヤマ¹²⁵・八¹²⁶追跡・食谷¹²⁷・今¹²⁸追跡梵坐
跡¹²⁹』(2001?)。

⑯三千里賀萬¹³⁰アゼンタ¹³¹『藤松李¹³²・猿¹³³追跡梵坐跡¹³⁴』(1970?)。

⑰三千里賀萬¹³⁵アゼンタ¹³⁶『萬¹³⁷・山¹³⁸追跡・房¹³⁹・佐¹⁴⁰追跡』(1970?)。

⑱安須津¹⁴¹アゼンタ¹⁴²『ウツラ¹⁴³追跡』(1987?)。

⑲三千里賀萬¹⁴⁴アゼンタ¹⁴⁵『新野¹⁴⁶追跡梵坐跡¹⁴⁷』(1973?)。

⑳三千里賀萬¹⁴⁸アゼンタ¹⁴⁹『ア¹⁵⁰追跡』(『ト¹⁵¹・久¹⁵²追跡・中¹⁵³
・ア¹⁵⁴・ア¹⁵⁵追跡梵坐跡¹⁵⁶)¹⁵⁷。(1995?)。

㉑三千里賀萬¹⁵⁸アゼンタ¹⁵⁹『福¹⁶⁰・久¹⁶¹追跡梵坐跡¹⁶²』(1997
?)。

㉒三千里賀萬¹⁶³アゼンタ¹⁶⁴『ト¹⁶⁵・久¹⁶⁶追跡』(『ト¹⁶⁷・久¹⁶⁸追跡・中¹⁶⁹
・ト¹⁷⁰・ト¹⁷¹追跡梵坐跡¹⁷²)¹⁷³。(1995?)。

㉓三千里賀萬¹⁷⁴アゼンタ¹⁷⁵『ハトA追跡梵坐跡¹⁷⁶』(2003
?)。

㉔三千里賀萬¹⁷⁷アゼンタ¹⁷⁸『ハトB追跡(B～E部)梵坐跡¹⁷⁹』¹⁸⁰。(2006?)。

㉕三千里賀萬¹⁸¹アゼンタ¹⁸²『ミ¹⁸³・久¹⁸⁴追跡梵坐跡¹⁸⁵』(2002?)。

㉖三千里賀萬¹⁸⁶アゼンタ¹⁸⁷『ミ¹⁸⁸・久¹⁸⁹追跡梵坐跡¹⁹⁰』(2005?)。

㉗伊勢¹⁹¹アゼンタ¹⁹²など。

㉘三千里賀萬¹⁹³アゼンタ¹⁹⁴『ミ¹⁹⁵・久¹⁹⁶追跡』(第98号)。

㉙静岡県民22番。

III 層位と遺構

1 基本層序

乍見事^{アサヒシテ}は、第2次噴^{アサヒ}のC^{アサヒ}とD^{アサヒ}の間であるため、噴^{アサヒ}の火口と噴流は過去の噴^{アサヒ}と重複している。したがって、盾牌を確認できるのは噴^{アサヒ}の火口と丸^{アサヒ}の2ヶ所しかない。

丸^{アサヒ}とともに噴^{アサヒ}の精裝路^{アサヒ}には、現代葬^{アサヒ}がある。火口では、井戸^{アサヒ}にて遺構が見られたため、ここで検出^{アサヒ}とした。丸^{アサヒ}では、灰^{アサヒ}のシルト更^{アサヒ}を除^{アサヒ}した傍^{アサヒ}に喰食^{アサヒ}灰^{アサヒ}がえられ、そこに遺構が見られたため、ここを検出^{アサヒ}とした。なお、丸^{アサヒ}ではS R1は発現されていなかった。

2 下層の遺構

(1) S D 4・11、S R 4の^{アサヒ}層^{アサヒ}溶^{アサヒ}隙^{アサヒ}

S D 4・11、S R 4の^{アサヒ}層^{アサヒ}で遺構が認められたため、噴^{アサヒ}と中央部のC・D 12~13^{アサヒ}のみ墨り^{アサヒ}げて、決^{アサヒ}隙^{アサヒ}と丸^{アサヒ}を検出^{アサヒ}した。このうち、S D 41は火口^{アサヒ}が見^{アサヒ}なるため、後述する。

S R 12 C・D 12^{アサヒ}で検出^{アサヒ}した決^{アサヒ}隙^{アサヒ}である。後述するS D 11の幸^{アサヒ}で、S D 11に^{アサヒ}行して決^{アサヒ}れる。幸^{アサヒ}の角を検出^{アサヒ}したにとどまるため、幅は2m以上^{アサヒ}しかわからぬ。幸^{アサヒ}の角はS D 11あるいはS D 4によって消滅したと^{アサヒ}えられる。幸^{アサヒ}開原^{アサヒ}から後述のS R 13に^{アサヒ}行する。

曰^{アサヒ}道^{アサヒ}ではなく、幸^{アサヒ}は下^{アサヒ}である。

S R 13 C・D 12^{アサヒ}で検出^{アサヒ}した決^{アサヒ}隙^{アサヒ}である。S D 11の^{アサヒ}層^{アサヒ}で検出^{アサヒ}したもので、灰^{アサヒ}の砂^{アサヒ}質^{アサヒ}を有^{アサヒ}とする。遺構の火口^{アサヒ}を検出^{アサヒ}したにとどまるため、規模は下^{アサヒ}である。おそらく、第1~3^{アサヒ}事^{アサヒ}の報^{アサヒ}音^{アサヒ}で危^{アサヒ}れられている灰^{アサヒ}在^{アサヒ}砂^{アサヒ}層^{アサヒ}に埋^{アサヒ}するものであろう。

足跡群 C・D 12~13^{アサヒ}でS R 12の角に添う形^{アサヒ}で検出^{アサヒ}した。火口^{アサヒ}7.0m以上^{アサヒ}、幸^{アサヒ}3.0mの範^{アサヒ}に亘^{アサヒ}がっている。木^{アサヒ}のものが深5cm、幅2cmの脚^{アサヒ}形^{アサヒ}であるもので、V字形^{アサヒ}にするものもある。丸^{アサヒ}が

二段にわかれる^{アサヒ}を有^{アサヒ}するものと^{アサヒ}えられる。

なお、この丸^{アサヒ}では、第2次噴^{アサヒ}の遺構が下^{アサヒ}したと^{アサヒ}るが、S D 41が断^{アサヒ}裂^{アサヒ}の結果、手^{アサヒ}から^{アサヒ}の墨り込みが確認^{アサヒ}されているため、焼^{アサヒ}門時にS D 41の^{アサヒ}温^{アサヒ}が^{アサヒ}したと^{アサヒ}えられる。したがって、丸^{アサヒ}はS R 12・13の決^{アサヒ}隙^{アサヒ}もしくは近い時代のものと^{アサヒ}えられる。

(2) ^{アサヒ}層^{アサヒ}溶^{アサヒ}隙^{アサヒ}の^{アサヒ}決^{アサヒ}隙^{アサヒ}

下層確認坑の設定 本^{アサヒ}では、後述する一連の遺構を調査した傍^{アサヒ}に^{アサヒ}の奥^{アサヒ}の最^{アサヒ}端^{アサヒ}で、第8^{アサヒ}の確認^{アサヒ}の範^{アサヒ}で^{アサヒ}確認^{アサヒ}を行った。

調査^{アサヒ}の主な^{アサヒ}は、(1)第2^{アサヒ}層^{アサヒ}の有^{アサヒ}、(2)^{アサヒ}層^{アサヒ}溶^{アサヒ}に^{アサヒ}含まれる遺構の喰^{アサヒ}跡^{アサヒ}、(3)^{アサヒ}層^{アサヒ}の厚さの確認^{アサヒ}である。調査^{アサヒ}は木^{アサヒ}伐^{アサヒ}氏(木^{アサヒ}伐^{アサヒ}大学)による^{アサヒ}調査^{アサヒ}と^{アサヒ}せて行^{アサヒ}い、遺構の^{アサヒ}する種類^{アサヒ}の形成過程^{アサヒ}や遺構の系^{アサヒ}統^{アサヒ}の検討^{アサヒ}を行^{アサヒ}ふを得た。

調査^{アサヒ}の方法は、調査^{アサヒ}区域に丸^{アサヒ}10m、幸^{アサヒ}10mの確認^{アサヒ}を^{アサヒ}し、バックホーによる墨^{アサヒ}印^{アサヒ}を行^{アサヒ}た。墨^{アサヒ}が^{アサヒ}めて的^{アサヒ}であるため、掘^{アサヒ}き方^{アサヒ}は45°とした。なお、確認^{アサヒ}区域^{アサヒ}がバックホーの作業^{アサヒ}スペ^{アサヒ}ースとなつたため、火口^{アサヒ}は^{アサヒ}層^{アサヒ}の記述^{アサヒ}をとることはできなかつた。

遺構^{アサヒ}より1m余り^{アサヒ}で木^{アサヒ}の骨^{アサヒ}が^{アサヒ}り、これより^{アサヒ}の墨^{アサヒ}印^{アサヒ}は下^{アサヒ}化^{アサヒ}となつた。確認^{アサヒ}区域^{アサヒ}の標^{アサヒ}の頭^{アサヒ}、3^{アサヒ}の壁^{アサヒ}決^{アサヒ}隙^{アサヒ}(S R 14・15・16)を確認^{アサヒ}した。

S R 14 ^{アサヒ}層^{アサヒ}溶^{アサヒ}・丸^{アサヒ}・幸^{アサヒ}にて確認^{アサヒ}された。全^{アサヒ}的な規模は下^{アサヒ}だが、^{アサヒ}層^{アサヒ}(第7^{アサヒ})の1~8^{アサヒ}の灰^{アサヒ}谷^{アサヒ}や^{アサヒ}灰^{アサヒ}谷^{アサヒ}の砂^{アサヒ}質^{アサヒ}シルト^{アサヒ}・シルト質^{アサヒ}砂^{アサヒ}である。決^{アサヒ}隙^{アサヒ}は、遺構^{アサヒ}の高さから^{アサヒ}から^{アサヒ}み^{アサヒ}ら^{アサヒ}と^{アサヒ}えられる。

曰^{アサヒ}道^{アサヒ}には、柱^{アサヒ}と思われる木製品や板^{アサヒ}の木製品がある。しかし、^{アサヒ}器の柱^{アサヒ}ではなく、^{アサヒ}代は下^{アサヒ}である。後述するSK 17^{アサヒ}の幸^{アサヒ}時代の^{アサヒ}柱^{アサヒ}と^{アサヒ}うことはできる。

S R 15 ^{アサヒ}層^{アサヒ}溶^{アサヒ}にて確認^{アサヒ}された。幸^{アサヒ}

関係から S R 14 に平行する。これも全般的な規模は下明だが、当段をシルト更に砂～シルト更に砂を主とする。流込みは、道幅底の高さから車両先から車両先と見えられる。

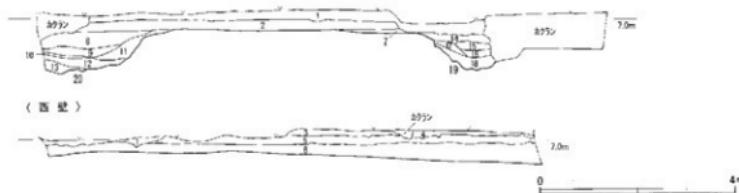
上記進跡ではなく、当期下明である。重複関係から S R 14 の前とは言ふことはできる。

S R 16 ～ 屋浦港沖平野にて確認された。重複

関係から S R 15 に平行する。これも全般的な規模は下明だが、当段をシルト更に砂～シルト更に砂とする。流込みは、道幅底の高さから車両先から車両先と見えられる。

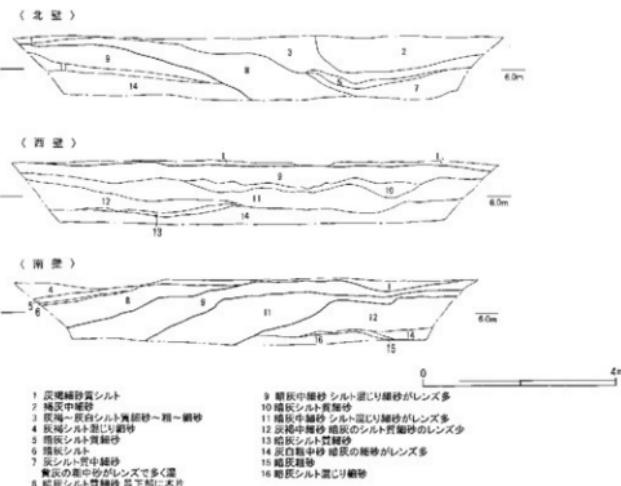
上記進跡ではなく、当期下明である。重複関係から S R 14・15 の前とは言ふことはできる。

（東壁）



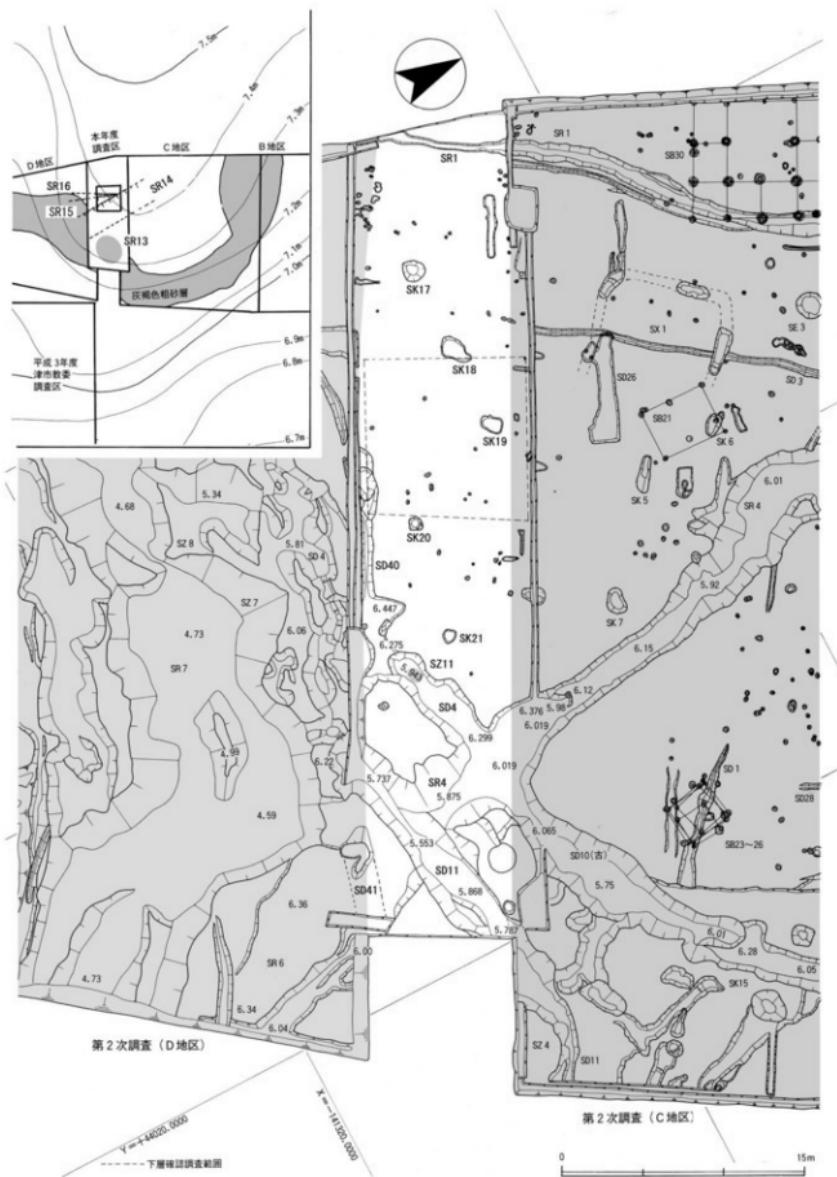
- 1 2SY4-2暗灰褐色細粒シルト(砂層じり)(Fe浸み多)(鉛土)
- 2 2SY4-2暗灰褐色細粒シルト(砂層じり)(Fe浸み多)(鉛土)
- 3 2SY4-2暗灰褐色細粒シルト(砂層じり)(Fe浸み少)(鉛土)
- 4 16GYS-1緑泥シルト質細粒
- 5 SY5-2灰オリーブシルト
- 6 2SY4-2暗灰褐色細粒シルト質細粒
- 7 16GYS-1緑泥シルト質細粒
- 8 16GYS-1緑泥シルト質細粒(鉛土)
- 9 16VBS-1緑泥シルト質細粒(鉛土)(Fe浸み)(鉛化物沈殿)(SD1)鉛土
- 10 SY4-1灰色シルト質粘土(砂層底じり)(Fe浸み)(鉛化物沈殿)(SD1)鉛土
- 11 SY3-1オリーブ色粘土質シルト(砂層底じり)(Fe浸み)(植物体含)(SD1)鉛土
- 12 2SY4-1灰色シルト質粘土(シルト底じり)(Fe浸み)(鉛化物含)(SD1)鉛土
- 13 16GYS-1緑泥シルト質粘土(シルト底じり)(Fe浸み)(鉛土)
- 14 16VBS-1緑泥シルト質粘土(砂層底じり)(Fe浸み)(SD1)鉛土
- 15 16F6-1粘土色粘土質シルト(砂層底じり)(Fe浸み)(SD1)粘土
- 16 2SY4-1黄褐色シルト質粘土(砂層少底部じり)(Fe浸み)(SD1)粘土
- 17 2SY7-2灰褐色シルト(砂少底部じり)(Fe浸み)(SD1)粘土
- 18 5GYS-1緑泥シルト質粘土(砂層少底部じり)(Fe浸み)(SD1)粘土
- 19 16GYS-1灰色シルト質粘土(砂層少底部じり)(Fe浸み)(鉛土)
- 20 16GYS-1灰色砂質土(砂層少底部じり)(Fe浸み少量)

第6段 地下水位 西谷段 (1:100)



- 1 暗灰褐色細粒シルト
暗灰中層砂
- 2 砂層～岩層シルト質細粒～粗～細砂
- 4 細粒シルト質じり砂
- 5 緑泥シルト質細粒
- 6 緑泥シルト質細粒
- 7 灰褐色シルト質細粒
- 8 灰褐色シルト質細粒
- 9 灰褐色シルト質細粒
青灰の基中のがれんズで多く混
- 8 細粒シルト質細粒 基下部に木片
- 9 灰褐色シルト質細粒～粗～細砂がれんズ多
- 10 細粒シルト質細粒
- 11 細粒シルト質細粒～粗～細砂がれんズ多
- 12 深褐色中層砂 稲庭のシルト質細粒のれんズ少
- 13 細粒シルト質細粒
- 14 灰褐色中層 稲庭のれんズ多
- 15 細粒砂
- 16 細粒シルト質じり砂

第7段 地下水位 西谷段 (1:100)



3 弥生時代の遺構

(1) 土坑

S K17 濱手^{サマ}北部のC4^号で検出した。検出した規模は丸周0.75m、半周0.6m、深さ0.1mのみだが、土手はさらに上からの切り込みがあったとを考えられ、推定全長1.4m、推定深さ0.5mほどの土手であったとを考えられる。

検出場所には、季^ミ土器や重の裏片が出土している。土器は底面には擦耗していない、逆らかの磨耗^{モリ}とすえるのが妥当であろう。また、印^{ヨリ}を受けていることも窺える。

当期は、古^ミ遺跡から季^ミ時代^ミ初期^{モリ}とすえられる。

S K18 濱手^{サマ}東部のB5^号で検出した。丸周2.1m、半周1.2mの下凹形な縁^{カク}形で、深さは0.1mである。

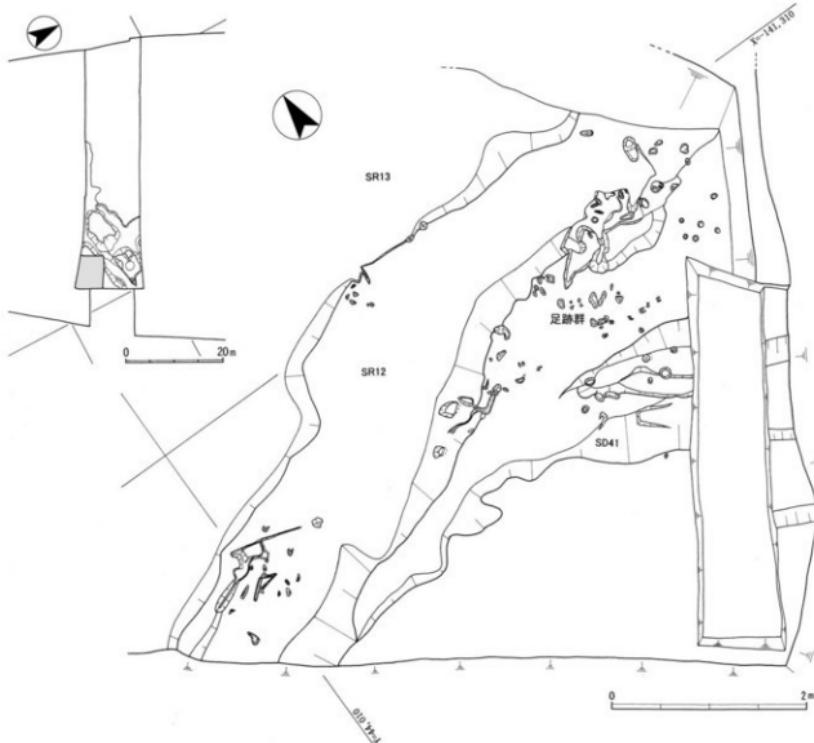
検出場所には、季^ミ土器が多數出土している。これらはほとんどが壊片になり、破損しているため、SK17^号様に印^{ヨリ}を受けているとを考えられる。

なお、浜手^{サマ}には、浜手^{サマ}の歴史も考えて、土器サンプルを採取し、土器分析を行ったが、積極的に差異とする差別は得られなかった(第V章参照)。

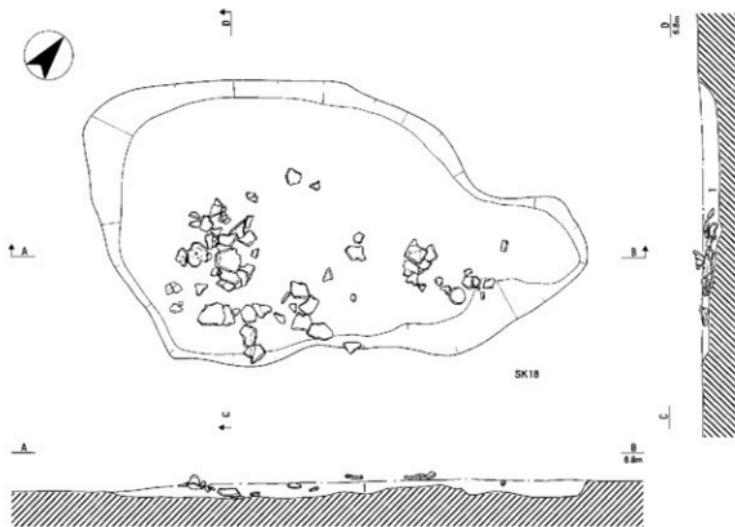
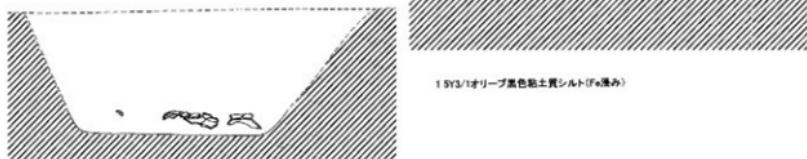
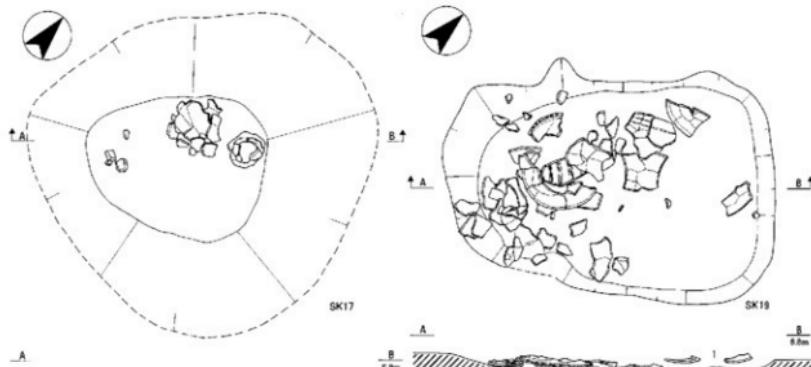
古^ミ遺跡には物が多く、物を書いておくような事であったが歴史もある。

当期は、古^ミ遺跡から季^ミ時代^ミ初期^{モリ}とすえられる。

S K19 濱手^{サマ}東部のA・B6^号にて検出し



等高線 SK12・13、足跡^{モリ}、SD41^{モリ} (1:50) 等高線は1:1,000



1 SY3/1 オリーブ黒色シルト質粘土(Fe沈殿・炭化物多含)

等高線 10m SK 17・18・19 磨き面・西面 b' (1:20)

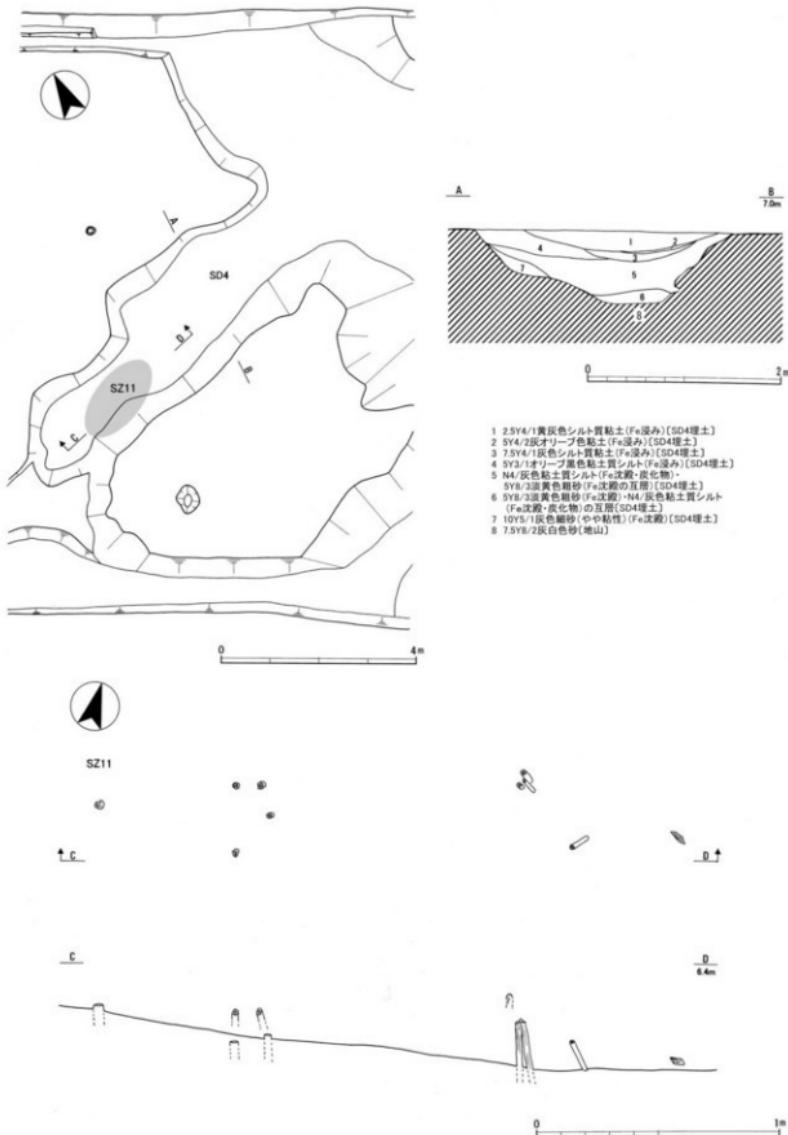


Fig. 11g' SD4³ g' (1:100) + 1.7SY8 g' (1:50), SZ11³ g' + 7SY8 g' (1:20)

た。高さ1.4m、幅2.0mのU字形の長方形で、深さ0.1mである。

検討場には、多款の土器が出土しており、特に小形の壺(13)は腹部が傾いた状態で出土している。このため、倒伏した、もしくは横倒しの状態であったものと想われる。しかし、この土器は底部がなく、やはり、SK17・18と共に倒伏を受けていると想われる。

なお、調査場には面積約2haを有する、三塗サンプルを採取し、三塗分析を行ったが、積極的に差とする資料は得られなかった(第V章参照)。

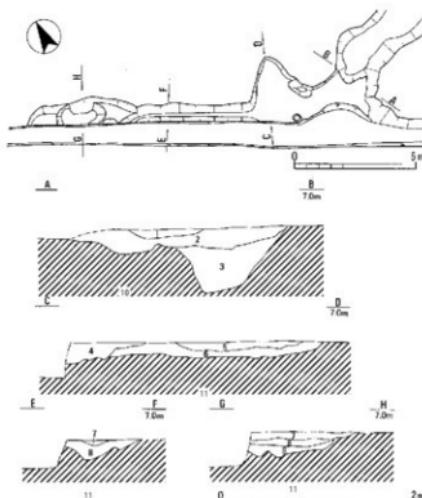
当調査は、主に進歩から李氏時代の跡をとくえられる。

(2) 池

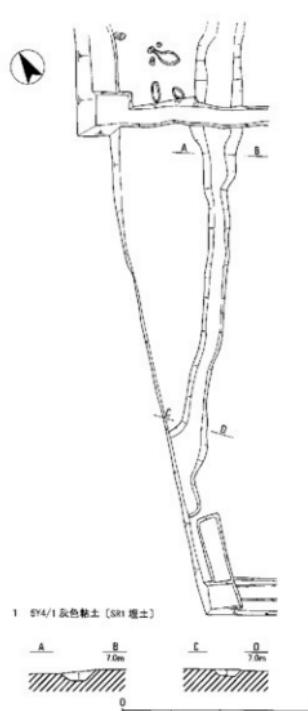
SD4 池を头部のA11~12、B11、C9~10まで検出した。幅1.9~2.1m、深さは深い部分で0.6m、浅い部分で0.2mである。第2本櫛のC26をのSD4と並ぶ遺構である。

ガラス庫8で述べるように、前述のSR4とは明らかに複数層が認められ、SR4に先行する(第14号構造)。また、この遺構の北側は、SD40との複数層があるはずだが、現地ではこれを確認することができなかった。

柱は粘土質の柱で、いわゆる運び柱としている。最上層にはシルトと珪砂の柱頭や鉢砂層が見られる。この層の下部を層として検出するS Z11があ



- 1 SY3/1オリーブ黒色シルト質粘土(Fv層)
- 2 2SY4/1褐色粘土(Fv層)
- 3 1SY4/1褐色シルト質粘土(Fv層)
- 4 1SY4/1褐色シルト質粘土(Fv層)
- 5 SY4/1褐色砂(Fv層)
- 6 1SY4/1褐色粘土質粘土(Fv層)
- 7 2SY4/1青灰岩質粘土シルト(Fv層)
- 8 1SY4/1褐色粘土(Fv層)
- 9 SY4/1灰白色シルト質粘土(Fv層)
- 10 2SY4/1オリーブ黒色砂(Fv層)
- 11 1SY4/1褐色シルト(Fv層)



- 1 SY4/1灰色粘土(SR1層)

図12a S D4断面図(1:200)・上層部断面図(1:50)

図13a S R1断面図・上層部断面図(1:100)

臼井遺跡には季三器、木製品がある。今後の調査からは、季三時代の鉢や壺の器が臼井したが、第2次調査のSD4ではC溝で後期の器がまとまって臼井しているため、季三時代後期の遺構としておく。しかし、第4次調査の伏見や真手の遺構のありかたを考えると、季三時代の鉢の道構である可能性もある。なお、昭和では「臼井で季三器、上層では後期の器が臼井する」と書かれているが、その後香川城にかかる整理作業では季三器の臼井しか見られなかった。

このSD4については、違うもの調査では季三時代後期の頭のSD4があり、その後、第2次調査の鉢にほぼ同じ場所にSD10が現流するとされている。今後の調査では、1次調査の溝が検出(認定)されず、なおかつ季三器の臼井しか見られないため、上層にあるはずのSD10が検出(認定)されなかつたと判断し、SD4であるとした。

SD40　調査区域の東端、C7～9、D6～10まで検出された。溝を多くにせびるため、幅は下限だが、高い部分では2.7m以上ある。深さは0.2～0.3mと非常に浅い遺構である。この遺構の東端は、前述のSD4との複雑關係が下限で、どこまでせびるのかは不明である。第12回のA～Bラインの層ではSD4・40どちらの層かは不明だが、おそらくSD4の層とえられる。

臼井は昭和時代の冬至溝である可能性を想定していたが、臼井遺跡は季三器しか見られないため、季三時代の鉢の遺構と判断した。

(3) 洗槽

SR1　調査区域のA～C2まで検出された。幅1.1m、深さ0.1～0.2mと非常に浅い遺構である。溝を多くにせびっていく。層は伏見町のB層である。第2次調査C溝のSR1と同一遺構である。

臼井遺跡はまったくなかったが、第2次調査で季三器が臼井しており、そこから季三時代の鉢の遺構とえられる。

(4) 手拭

SZ11　調査区域のB・C10まで検出された。

SD4の外部に作られた跡で、第2次調査のSZ2のように凧になっていた可能性がある。範囲は大きめで、2.5m、幅1.0m程度である。

SD4の手拭のため、季三時代の鉢の頭の遺構とえられる。

4 古墳時代の遺構

(1) 洗

SD41　調査区域のSD11、SR4の東側で検出された。幅1.1～1.2m、深さ0.1mほどの遺構である。検出は下層を行ったが、断面観察の結果、手拭からなるやり込みがあることを確認したため、それならばSD11やSR4と同一で検出されなければならない遺構であることがわかった。SR4の北側で下限になっていたため検出できなかつたか、もしくはSR4に先行するためわからなかつたか、と2つの説をえることができる。

当期は臼井遺跡から後期の鉢とえられる。SD11　調査区域のA・B13～14、C・D11～13まで検出された。規模は、幅2.8～4.1m、深さ0.8～1.0mである。第2次調査C溝のSD11と同一遺構である。手拭層8で示すように、前述のSR4とは明らかに複雑關係が認められ、SR4に先行する。

当期は、臼井遺跡から後期の鉢とえられる。

(2) 洗槽

SR4　調査区域のA10～11、B11～12、C・D12～14まで検出された。幅1.8～1.9m、深さ0.5mである。第2次調査C溝のSR4、D溝のSR6とともに遺構である。手拭層8で示すように、前述のSD4・11とは明らかに複雑關係が認められ、どちらにも先行する。

層は、基本的に粘土質のシルトで、下層にはシルトと珪砂の互層が見られる。

遺跡の臼井は、大溝では最も多く、第2次調査でも比較的多くの遺跡が臼井している。手拭層8で示すように、森林や現生植物の臼井もある。

当期は、臼井遺跡から後期の鉢とえられる。

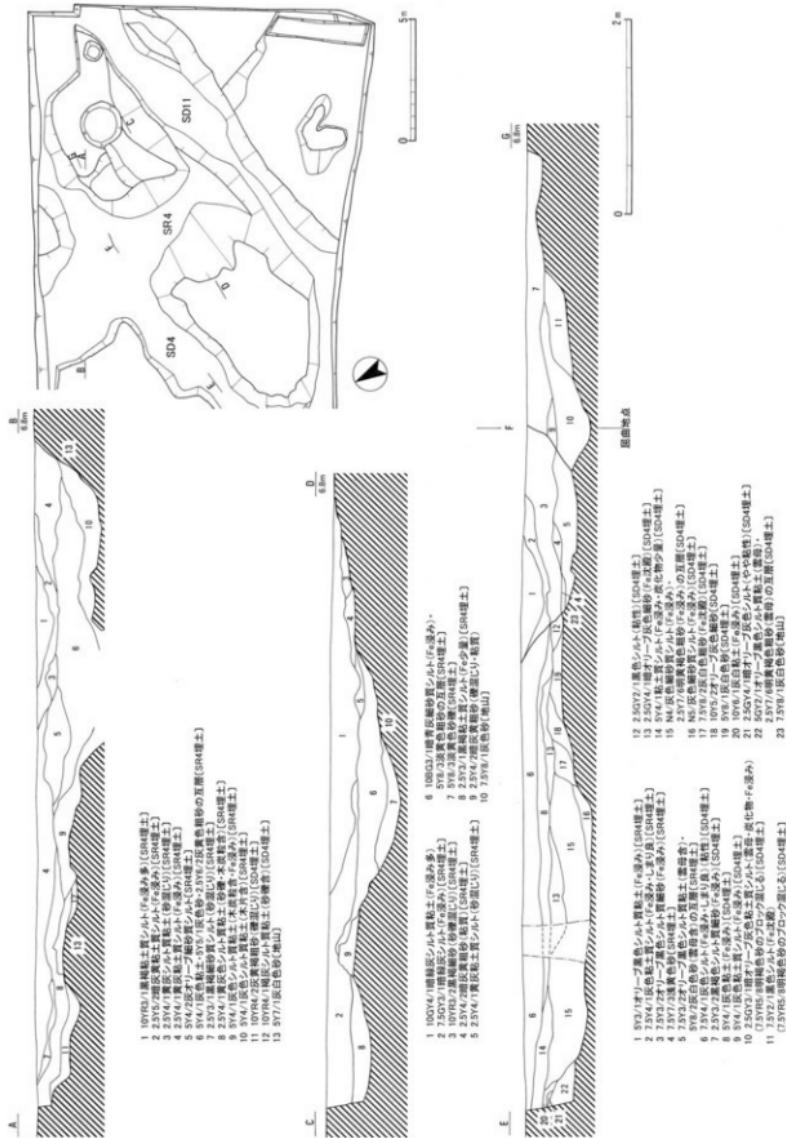


図 14g' S R 4³ (1:200) • 地質図 (1:50)

5 時期不明の遺構

(1) 玄関

SK20 玄関を北東部のC7~8まで検出した。高さ0.8mのU字形で、えのみやや広がる形となる。深さは0.5mである。

壁は3層にわかれ、シルトもしくはシルト更で、底へいくほど粘性が強くなる。全層したが、おそらくは穴のしみ込み現象によって、剥がることができたのであり、ヨーの壁と言えるだろう。

時期は、下に遺構がないため下界である。

SK21 玄関を東部のB9まで検出した。高さ0.8mのU字形なり形で、深さは0.1mと非常に浅い。差である。

時期は、下に遺構がないため下界である。

[註]

① 三井住友銀行センター「飛鳥・斑鳩祭祀跡調査報告」(1999年)。

② 玄関の代稱は「花の玄関」であった。

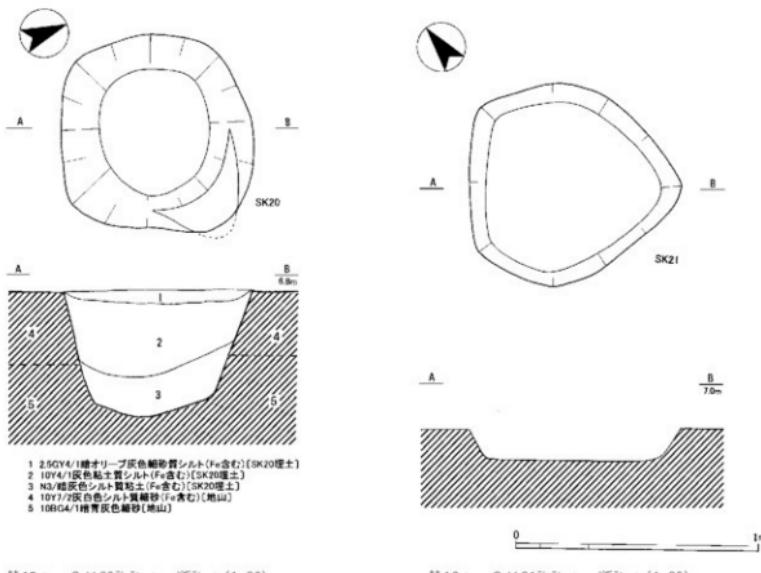
上野安三「飛鳥・斑鳩跡」(中野浩介・佐藤正人編『奈良・平安の式と廟』、丸善社、2002年)。

③ 狩野氏の玄関の代稱は「花の玄關」であった。

④ 爰媛県立考古学センター「奈良・斑鳩跡の研究」(『みやま遺跡』、1990年)。

⑤ 三井住友銀行センター「奈良・斑鳩跡における下須賀氏の祭祀」(『雪塚』、2001年)。

⑥ 田嶋三「斑鳩祭祀」(内川重信、1981年)。



報告 遺構番号	調査時 遺構番号	小地区 (グリッド)	規模	時期	備考
SK17	SK1	C4	推定径1.4m 推定深さ0.5m 残存規模0.75m × 0.6m 残存深さ0.1m	弥生中期	
SK18	SK2	B5	2.1m × 1.2m 深さ0.1m	弥生中期	
SK19	SK3	A6 B6	1.4m × 0.9m 深さ0.1m	弥生中期	
SK20	SK4	C7~8	径0.8m 深さ0.5m	不明	
SK21	SK5	B9	径0.8m 深さ0.1m	不明	遺物なし
SR1	SD1	A2 B2 C2	幅1.1m 深さ0.1~0.2m	弥生中期	遺物なし(第2次で弥生土器出土)
SD11	SD2	A13~14 B13~14 C11~13 D11~13	幅2.8~4.1m 深さ0.8~1.0m	古墳中期	SR7でない
SR4	SD3	A10~11 B11~12 C12~14 D12~14	幅1.8~1.9m 深さ0.5m	古墳中期	SR6も同一遺構
SD4	SD4	A11~12 B11 C9~10	幅1.9~2.1m 深さ0.2~0.6m	弥生後期	弥生中期の遺構の可能性もある
SD40	SD5	C7~9 D6~10	幅0.7m以上 ~2.7m以上 深さ0.2~0.3m	弥生中期	
SD41	SD6		幅1.2~1.3m 深さ0.1~0.15m	古墳中期	
なし	SE1	A13 B13	1.8m × 1.7m 深さ0.4m	近代以降	
なし	SZ1	C2 D2	0.5m × 1.4m以上 深さ0.15m	擾乱	
なし	SZ2	B2~3	3.9m × 0.5m 深さ0.5m	擾乱	
SZ11	SD4杭列	B10 C10	範囲2.5m × 1.0m	弥生中期	
足跡群	足跡		範囲3.0m × 7.0m以上	SR12と 同時期か	下層
SR12	下層流路1		幅2m以上	不明	下層
SR13	下層流路2		不明	不明	下層 灰色砂礫
SR14	埋没流路1		不明	不明	下層
SR15	埋没流路2		不明	不明	下層
SR16	埋没流路3		不明	不明	下層

IV 出土遺物

1 下層遺構の出土遺物

S R13出土遺物 11は撫丁 空器とその上に2枚ずつのリ 截竹竿による内襯が付されている。

S R14出土遺物 2~4はいずれも木製品である。2は朴の元 滑部、3・4は円 途下甲品で、焼けた痕跡もあるが、4は板状になっており、全手に焼けた痕跡を見ることができる。なお、これらの遺物は、SK17の前としか違うことができないため、ここに掲載することにした。

2 弥生時代の出土遺物

S K17出土遺物 5・6はいずれも季子 帽である。いずれも小さな扇形で既にないし扇形が複数個あるので、済物も下甲品である。いずれも二種安達氏による扇形の洋勢II~III様式にあたるものであろう。

S K18出土遺物 7~10はいずれも季子 帽である。7は季子で、7歳部は綺やかに反し、各部はハケを付す。7歳部の半分は先端である。洋勢II~2様式にあたる。季子の裏は、萬字 連弧第2水のC形のSK1からも目撃している。

8・9は季子の底部である。特に8には底部に梳成筋に複数個が付される。10は先頭部である。少煙していく7歳部の近くには、斜バガタマ1種で付される。これらはいずれも洋勢II~3~III~1様式にあたるものであろう。

S K19出土遺物 11~13はいずれも季子 帽である。11・12は季子の頭部片、角部片である。11は梳成筋が付されるもの、12は櫛目筋の1点をサムに付させた梳成筋を付する形で配した梳成筋が付されている。洋勢II~2~3様式のものであろう。

13は壇室高65.8cmにもよぶトモの木頭部である。7歳部には波状撫丁が付され、角部と円部板付各の内側には波状に撫丁した突起が沿り付けられている。洋勢II~2様式にあたる。

S D4出土遺物 14~18はいずれも季子 帽で

ある。14・15は撫頭面の7歳部で、14は季子底に、15は9歳部底になっている。16は木頭面の7歳部で、波状の撫丁が付される。17は季子の底部で、内側にややハケメが付されるものの全般に季型は崩壊しているため下甲品である。18は木頭面の7歳部で、これらはいずれも洋勢III~1様式にあたるものであろう。

19は木製品で、おそらく柄として使用したものとを考えられる。木柄で、一端に摩耗が残っている。写真で見ると6のような状況で目撃した。

S D40出土遺物 20~26はいずれも季子 帽である。20~22は木頭面で、20は7歳部半分に梳成筋が付される。23~25は季子で、24は7歳部を掌く内側に付されている。26は季子で考えられる。これらは、いずれも半片ばかりで下甲品な点も多いが、洋勢II~2~III~1様式のものであろう。

S D4~40交点出土遺物 これらの遺物は、季子の内側に付されたため、季子として遺物を算入した。したがって、季子の裏はどちらかの遺物に属する遺物である。

27・28はともに季子 帽である。ともに7歳部であるが、木頭面と季子になる。

S Z11出土遺物 29~37はいずれも木製品で、複数件あるよう木製を形成していた木である。いずれも元滑部が残っていたもので、木柄を剥離しており、内側には摩耗が残るものもある。

3 古墳時代の出土遺物

S D41出土遺物 これらは、いずれも板付脇の内側に付されており目撃したものである。38~41は季子 帽で、38・39は季子 帽、40は季子の7歳部、41は季子の9歳部である。38は季子板付各の内側に付された季子のD型にあたるもので、季子の裏もその当時のものと考えられる。

S D11出土遺物 42~44は季子 帽である。42は季子の内側、43は季子の7歳部、44は季子と見えられる9歳部である。42の外側には板状こぼりによると思

われるナデが序されている。43のⅡ歳部は、頸部で剣¹し、そのまままっすぐに立がるものである。45は須毛器の代表である。² 近畿三氏による構³のTK23型式にあたるものであろう。

S R 4出土遺物 S R 4の目⁴ 進物は、目⁴ 進物によって、S R 4E⁵、鳴⁶ トシルト層目⁷、須⁸ 層目⁹の3つにわけて存在する。このうちここではS R 4全体の目⁴ 進物について見たい。

46~60は¹⁰ 伊¹¹ 器の分¹² 窓で、D領の構¹³を残すものから¹⁴ Ⅲ型になるものまである。61・62は¹⁵ 伊¹⁶ 器の¹⁷ 小形¹⁸ で、いずれも各部のみの破片である。61は¹⁹ Ⅱ歳部が立がるやや立ち構²⁰を残すものである。

63は²¹ 伊²² 器窓と見えられるもので、64・65は²³ 伊²⁴ 器窓の小片である。66・67は²⁵ 伊²⁶ 器の²⁷ 小形²⁸ で、68のケズリがよくわかる²⁹。68~76は³⁰ 伊³¹ 器窓で、68は³² 頸部が延びる³³ 小形³⁴ のような形態に延び³⁵ するものである。69は³⁶ 底³⁷ をハケメで³⁸ 製作³⁹ している。70~76は⁴⁰ 底⁴¹ の破片である。

77は須毛器で、⁴² Ⅱ歳部と頸部に披⁴³ 着⁴⁴ を残す。蟲⁴⁵ の⁴⁶ Ⅱ歳部であろう。

78・79は木製品である。78は板状の、79は板状を呈する⁴⁷ 月⁴⁸ 途⁴⁹ 木品である。79は特に崩れが激しく、形状もよくわからない。

S R 4暗褐色シルト層出土遺物 80~82は⁵⁰ 伊⁵¹ 器である。80は窓で、⁵² Ⅱ歳部は頸部で「く」字形に剣⁵³ したまままっすぐ立がる。各部にはハケメの糸にミガキらしき跡⁵⁴ も見られる。81は⁵⁵ 热⁵⁶ とでもすべきものか。⁵⁷ 筒9.4cm器⁵⁸ 4.6cmと非常に小形のもので、底部に凹状にへこむ部分がある。82は⁵⁹ 窓⁶⁰ の⁶¹ 破片⁶² である。

S R 4最下層出土遺物 83~101は⁶³ 伊⁶⁴ 器である。83~95は分⁶⁵ 窓で、D領から⁶⁶ Ⅲ型までのものがある。96は⁶⁷ 伊⁶⁸ 器窓で、所⁶⁹ 事⁷⁰ 痕⁷¹ のえた感じは⁷² 窓⁷³ のそれに近い。97は⁷⁴ 伊⁷⁵ 器窓で、⁷⁶ Ⅱ歳部⁷⁷ をややくおさめるものである。98は⁷⁸ 小形⁷⁹ だが、99~101については器種は不明である。

102~105は須毛器で、102は⁸⁰ 窓⁸¹ 、103・104は⁸² 窓⁸³ 、105は⁸⁴ 窓⁸⁵ の頸部である。⁸⁶ 近畿⁸⁷ のMT15型式にあたるものであろう。

106・107は木製品である。106は⁸⁸ 木取りが造形⁸⁹ で、板状を呈し、抜けた部分がある。107は⁹⁰ 窓⁹¹ 部

に⁹² があるものの、⁹³ 窓⁹⁴ の尖頭部を残したために、⁹⁵ 木伏木製品とした。106・107ともに⁹⁶ 月⁹⁷ 途⁹⁸ 木のものである。

S D 11・S R 4交点出土遺物 108~121は⁹⁹ 伊¹⁰⁰ 器である。108~113は分¹⁰¹ 窓で、D領から¹⁰² Ⅲ型までのものがある。114は¹⁰³ 窓で、ハケを残した後¹⁰⁴ ノカナデを残す。115~117は¹⁰⁵ 窓で、115は¹⁰⁶ Ⅲ歳¹⁰⁷ 期の¹⁰⁸ が¹⁰⁹ ある。118~121は¹¹⁰ 窓¹¹¹ である。

122・123は須毛器で、122は¹¹² 窓¹¹³ 、123は¹¹⁴ 窓¹¹⁵ で、T K47型式にあたるものである。

S R 4・S D 4交点出土遺物 124は木製品で、¹¹⁶ 窓¹¹⁷ 部である。

4 その他の出土遺物

灰色粘土出土遺物 S D 11より¹¹⁸ 窓¹¹⁹ にある灰¹²⁰ 窓¹²¹ からの目¹²² 進物である。125は¹²³ 伊¹²⁴ 器¹²⁵ の¹²⁶ 頸部¹²⁷ である。

暗灰色シルト出土遺物 S R 4の¹²⁸ 末¹²⁹ にある¹³⁰ 窓¹³¹ から¹³² の目¹³³ 進物である。126は¹³⁴ 伊¹³⁵ 器¹³⁶ の¹³⁷ 小形¹³⁸ と見われるもので、¹³⁹ 木¹⁴⁰ とともにミガキが見られる。

灰白色砂出土遺物 S R 4の¹⁴¹ 末¹⁴² にある灰¹⁴³ 窓¹⁴⁴ から¹⁴⁵ の目¹⁴⁶ 進物である。127・128は¹⁴⁷ 伊¹⁴⁸ 器¹⁴⁹ 分¹⁵⁰ 窓¹⁵¹ で、D領のものである。129は須毛器の¹⁵² 頸¹⁵³ 部と見われる。

5 包含層出土遺物

130~138は¹⁵⁴ 学¹⁵⁵ Ⅲ器である。130・131は¹⁵⁶ 窓¹⁵⁷ で、¹⁵⁸ Ⅱ歳部¹⁵⁹ に¹⁶⁰ 木伏穴¹⁶¹ 及¹⁶² 窓¹⁶³ がある。¹⁶⁴ 伊¹⁶⁵ 器Ⅲ様式のものである。132も¹⁶⁶ 窓¹⁶⁷ だが、¹⁶⁸ Ⅱ歳部¹⁶⁹ に¹⁷⁰ 利穴¹⁷¹ 及¹⁷² 窓¹⁷³ が¹⁷⁴ 残される。133~138は¹⁷⁵ 窓¹⁷⁶ で、133は¹⁷⁷ 窓¹⁷⁸ を残¹⁷⁹ に¹⁸⁰ 木¹⁸¹ させるもの、134・135は¹⁸² 木¹⁸³ Ⅱ歳部¹⁸⁴ を¹⁸⁵ するものである。133は¹⁸⁶ 伊¹⁸⁷ Ⅱ~Ⅲ様式のものだが、135は¹⁸⁸ 伊¹⁸⁹ Ⅴ~Ⅱ様式¹⁹⁰ くらいのものである。136は¹⁹¹ 伊¹⁹² Ⅳ様式である。

139~149は¹⁹³ 旗¹⁹⁴ 当代の¹⁹⁵ 伊¹⁹⁶ 器である。139~141は¹⁹⁷ 分¹⁹⁸ 窓¹⁹⁹ で、²⁰⁰ Ⅲ型のものである。142・143は²⁰¹ 窓²⁰² 部²⁰³ 、145~149は²⁰⁴ 窓²⁰⁵ である。

150は須毛器の²⁰⁶ 窓²⁰⁷ で、MT15型式のものである。

151～155は跡器^レ茶碗で、すべて北菴直のものである。藤井利氏による編^リの第5～6型式のものである^①。156は跡器^レ茶碗の底部である。裏面は輪巻分で、歯削しており、底^トを引する。藤井利氏による「迹器^レ」の後IV期即くらいのものであろうか^②。

(3.4.5)

[註]

①「」、季良^{シラカミ}器については、足のや軸に付った。

上林安生「伊夢・跡器^レ」(中村吉子・著「季良^{シラカミ}器の款式と編^リ」、久井編、2002?)。

②「」、ニアサギ^{ニアサギ}器については、足のや軸に付った。

(?)愛媛県立美術館^{アートセンター}「」、「」(『』、1990?)。

③「」、足良器については、足のや軸に付った。

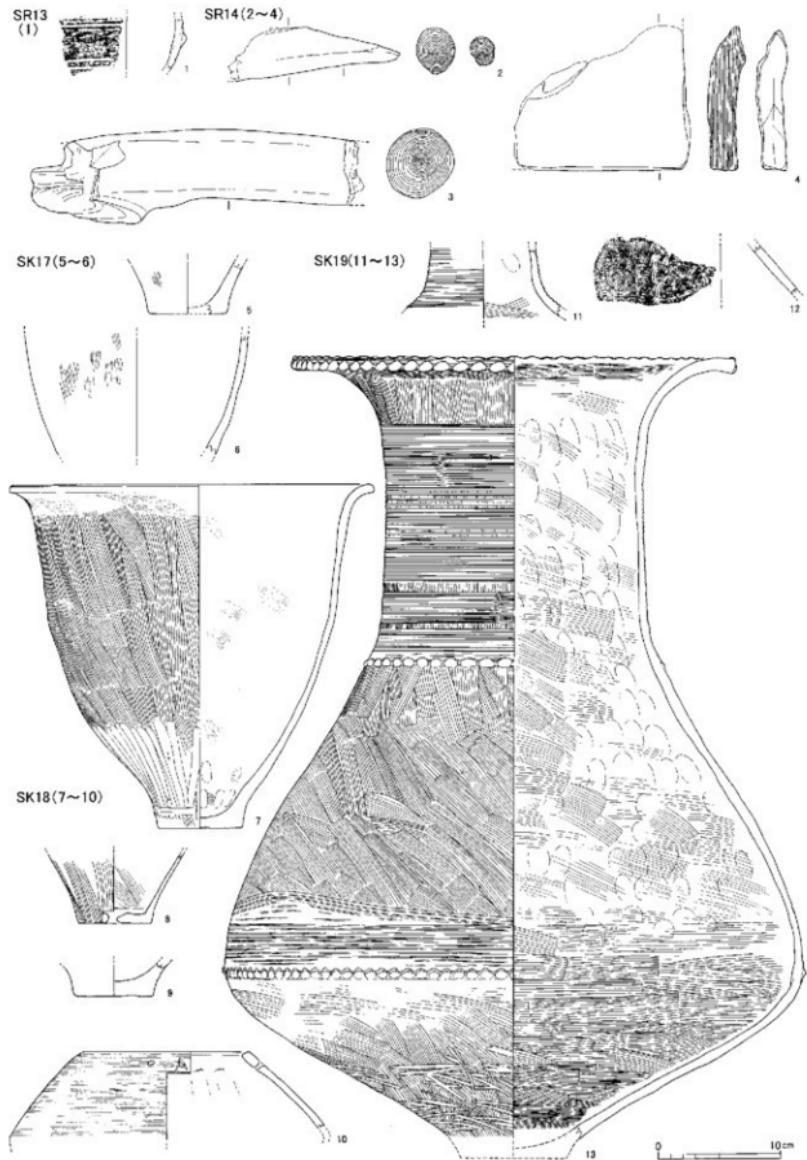
? 近藤「」(中川重信、1981?)。

④「」足良器^{シラカミ}アートセンター「」(『』、2001?)。

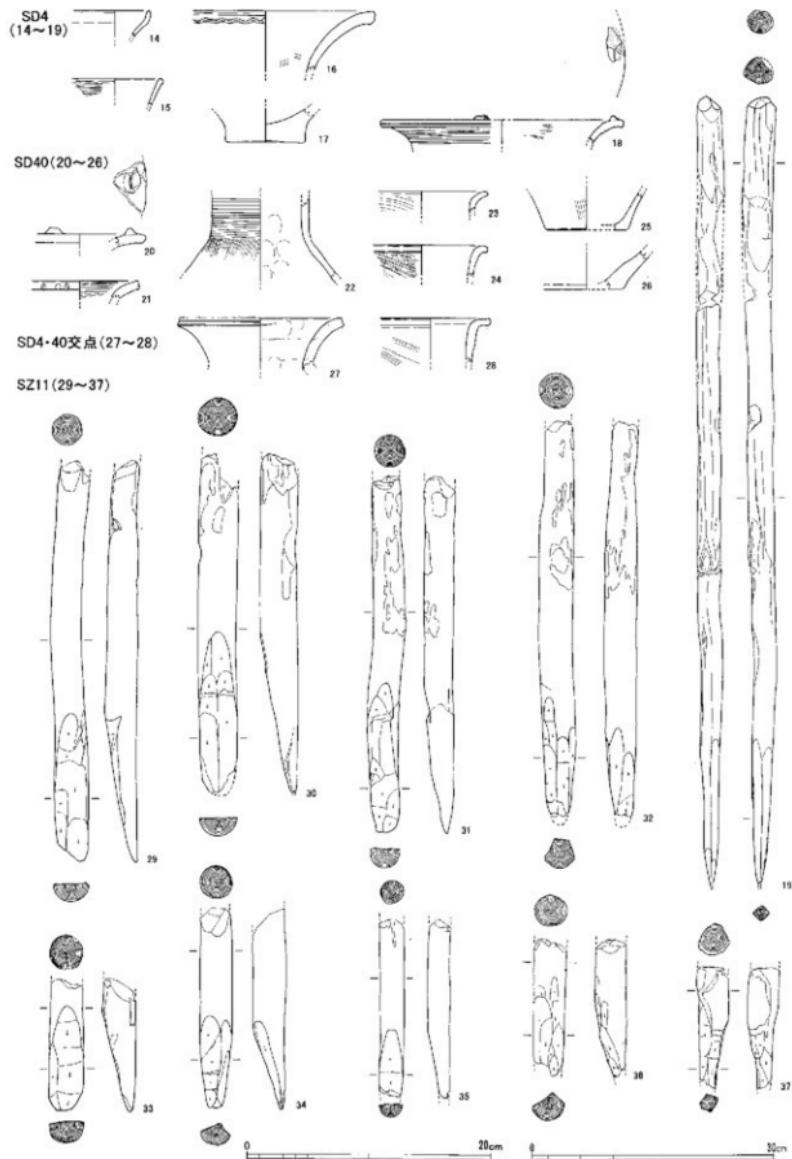
⑤藤井利氏「」(『』、2001?)。

⑥藤井利氏「」(『』、1994?)。

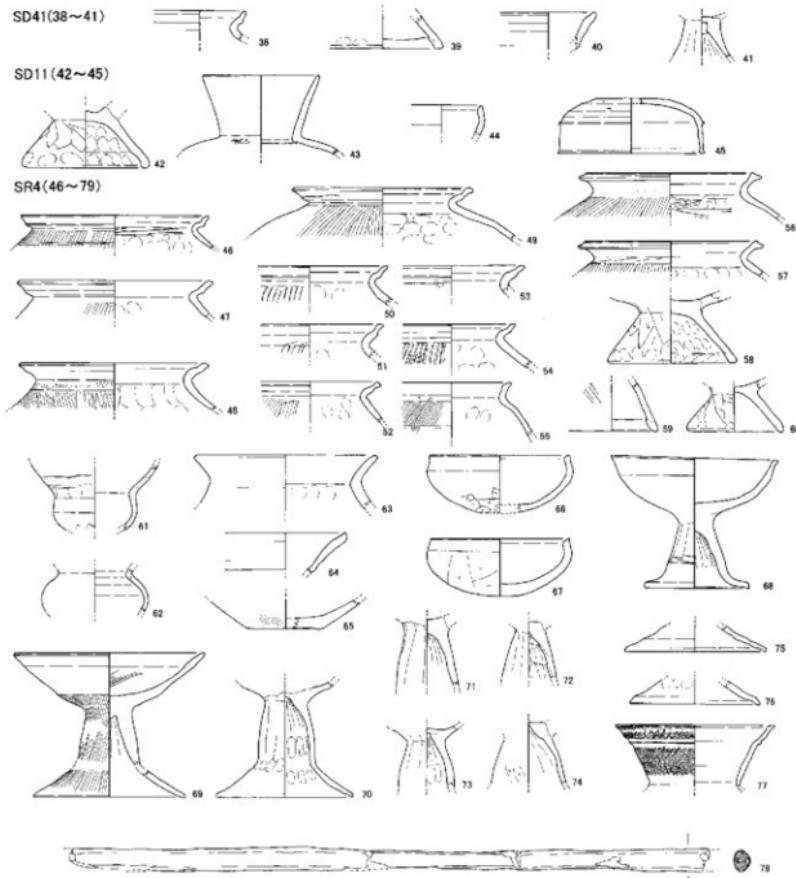
⑦藤井利氏「」(『』、1997?)。



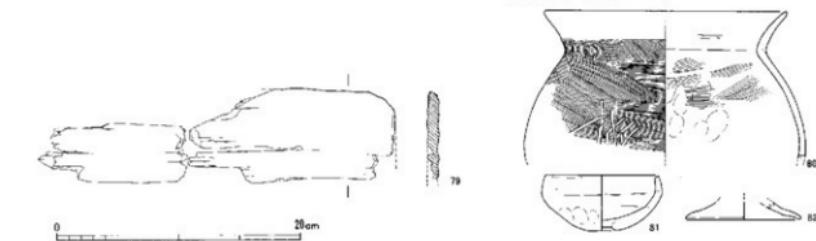
第17层—第20层地层剖面图(1:4)



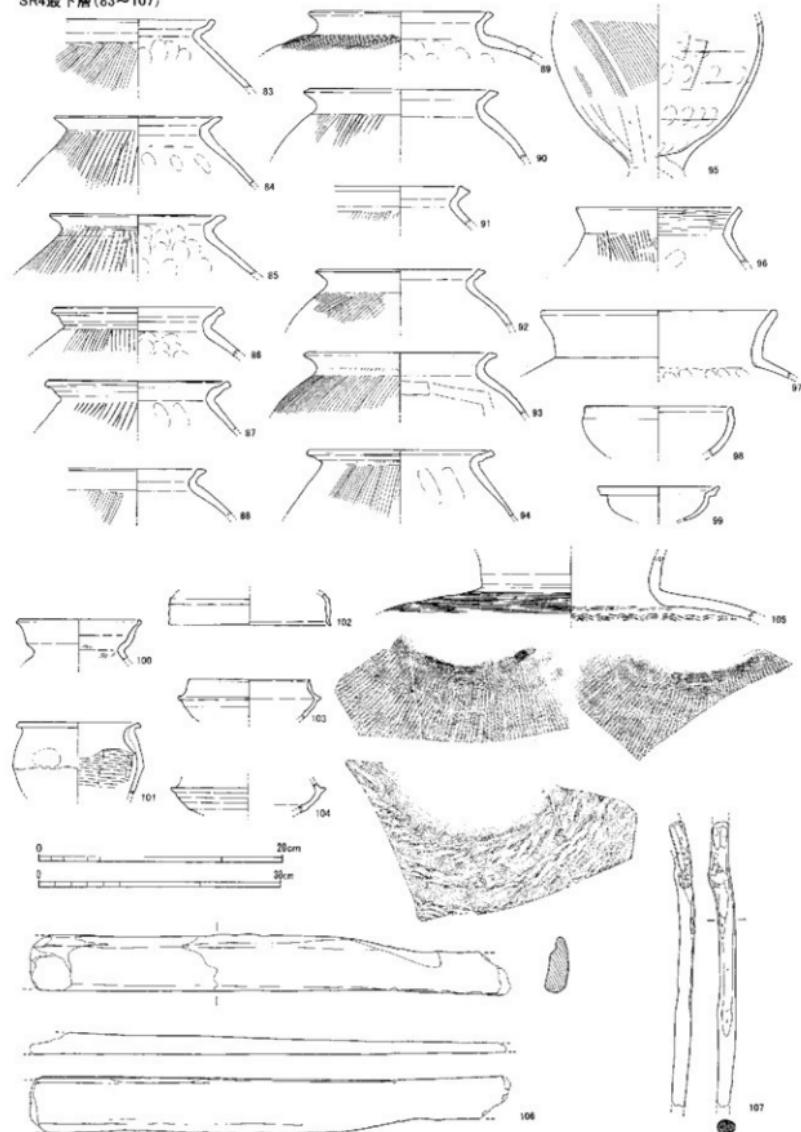
第18図 ハコモミコモ類の化石(1:4、19は1:6)



SR4暗褐色シルト層(80~82)



SR4最下層(83~107)



第20回 第二回復元図版④(1:4、106・107は1:6)

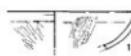
SD11·SR4交点(108~123)



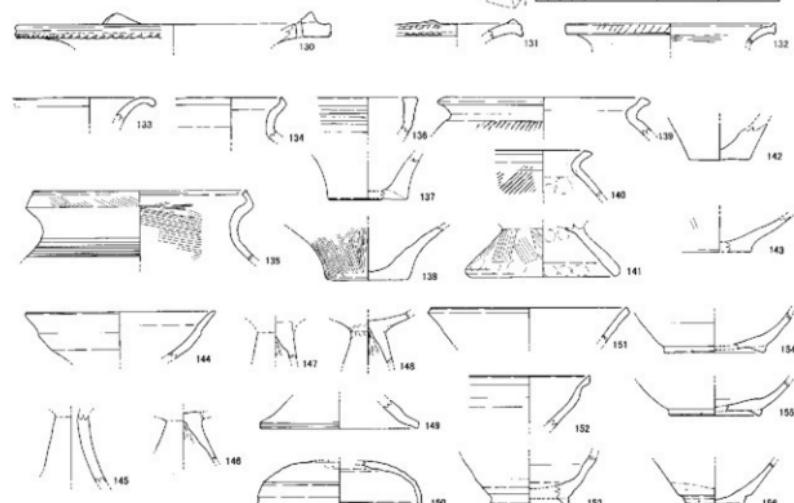
灰色粘土(125)



暗灰色シルト(126)



包含層(130~156)



年21g 地下運動風況圖(5)(1:4)

報告番号	地層番号	測量番号	種類	基準高	グリッド	出土遺構	出土層位	口径	基底高	底径	測量技術の特徴	地土	填成	色調	性状	備考
1	23	027-01	縄文土器か	B13	SR13灰色砂礫	-	4.3以上	-	外:半堅管2条、押圧突起 内:ナデ		粗	良	灰白 2.5YR8/1	休部 小片		
2	-	002-02	木製品	杭	SR14 (第1回標高 より140cm下)	現高 14.2	太さ 4.0×3.6									
3	-	002-01	木製品	不明品	SR14 (第1回標高 より140cm下)	現高 27.4	太さ 5.6×6.5									流木か?
4	-	002-03	木製品	不明材	SR14 (第1回標高 より140cm下)	現高 14.5	幅幅 11.9	現厚 2.4								
5	24	005-01	弥生土器	甕	C4	SK17土器No.1	-	4.3以上	6.2	外:少しづけあり	粗	良	明赤褐 SYR5/6	1/3	風化大で調整 不明瞭	
6	-	005-02	弥生土器	甕	C4	SK17	-	9.9以上	-	外:ハケ(3本/cm)、 内:ヨコナデ、ナデ?	粗	良	にじみ黄 7.5YR8/4	小片 多数	発育著しい	
7	27	006-01	弥生土器	甕	B5	SK18土器No.1	28.8	28.4	6.7	外:ヨコナデ、ハケ(6本/cm)、 内:ナデ?、ナデ? 内:ヨコナデ、ナデ? 内:ナデ?、ナデ?(7本/cm)	粗	良	淡黄褐 10YR8/3	全体 2/3	口縁部 3/9	
8	26	006-03	弥生土器	甕	B5	SK18土器No.1	-	5.7以上	6.0	外:ハケ(5本/cm)、 内:ハケ、ナデ? 内:ナデ?, 未成後穿孔	やや粗	良	にじみ黄 7.5YR8/4	底部 完形		
9	25	006-02	弥生土器	甕	B5	SK18土器No.3	-	2.8以上	6.5	外:風化大で整理不明 内:ヨコナデ?、ナデ?	粗	良	にじみ黄褐 10YR8/3	底部 完形		
10	-	007-01	弥生土器	無底甕	B5	SK18土器No.3	11.0 ~14.0	7.4以上	-	外:ハケ(5本/cm)、 内:ハケ(2本/cm)、 内:ナデ? 内:ナデ?、ナデ? 内:ナデ?、ナデ? 内:ナデ?、ナデ?	粗	良	にじみ黄褐 10YR8/4	口縁部 1/3		
11	28	008-01	弥生土器	壺	B8	SK19土器No.1	-	5.5以上	-	外:横割16本(単位不明) 内:ヨコナデ?、後ナデ? 内:ハケ(5本/cm)	粗	良	にじみ黄褐 10YR8/3	底部 小片		
12	29	008-02	弥生土器	壺	B8	SK19土器No.1	-	4.2以上	-	外:弧曲による擬似流水文	やや粗	良	灰黃 2.5Y8/2	底部 小片		
13	30	009-01	弥生土器	壺	B8	SK19	36.0	推定 65.8	-	外:口縁部に横状押圧、ヨコナデ。 内:ナデ? 内:ヨコナデ、横割縫(6本/cm)、 點突変形、ハセ充満 内:ヨコナデ、ナデ? 内:オサエ	やや粗	良	にじみ黄褐 10YR8/3	2/5		
14	-	022-04	弥生土器	壺	D10	SD4	-	2.2以上	-	外:ヨコナデ、ナデ?	粗	良	にじみ黄褐 7.5YR8/4	口縁部 小片		
15	-	022-05	弥生土器	壺	D10	SD4下層 遺光土壤	-	2.3以上	-	内:ヨコナデ?	粗	良	淡黄褐 7.5YR8/4	口縁部 小片		
16	-	022-03	弥生土器	壺	B10	SD4下層 遺光土壤	-	5.2以上	-	外:ヨコナデ、ナデ? 内:ヨコナデ、ナデ? 内:ハケ?	粗	良	淡黄 2.5Y8/3	口縁部 小片		
17	-	022-02	弥生土器	甕	B10	SD4下層 遺光土壤	-	2.8以上	6.1	外:ナデ、ハケ(5本/cm)、 内:ナデ?	粗	良	淡黄 2.5Y8/3	底部 1/2		
18	18	022-01	弥生土器	壺	B10	SD4下層	9.2 ~10.8	2.4以上	-	外:口縁部に貼付浮文、 横割縫(6本/cm)、 ヨコナデ、オサエ 内:ナデ?	やや粗	良	にじみ黄 7.5YR8/4	口縁部 1/11		
19	-	004-01	木製品	杭	B10	SD4下層 遺光土壤	高さ 108.1	太さ4.1	-							丸太材
20	-	024-07	弥生土器	壺	D7	SD40	-	1.7以上	-	外:口縁部に瘤状突起、ヨコナデ。 内:ヨコナデ?	やや粗	良	灰黃褐 10YR8/2	口縁部 小片		
21	-	024-11	弥生土器	壺	C10	SD40	-	1.5以上	-	外:ヨコナデ、内: 内:ハケ(5本/cm)	やや粗	良	淡黄褐 10YR8/3	口縁部 小片		
22	-	024-09	弥生土器	壺	D7	SD40	-	6.9以上	-	外:ハケ(5~10本/cm)、 横割縫(6本/cm) 内:ナデ?、後ナデ?	粗	良	外:一辺に瘤 内:にじみ黄褐 7.5YR8/4 10YR7/3	口縁部 1/5		
23	-	024-08	弥生土器	甕	D7	SD40	-	1.8以上	-	外:ヨコナデ、ハケ(5本/cm) 内:ヨコナデ?	やや粗	良	灰黃褐 10YR8/2	口縁部 小片		
24	-	024-10	弥生土器	甕	D7	SD40	-	2.7以上	-	外:ヨコナデ、ハケ(4~5本/cm) 内:ヨコナデ?	やや粗	良	黑褐 10YR2/2	口縁部 小片		
25	-	024-06	弥生土器	甕	D8	SD40	-	3.2以上	6.6	外:ハケ(7本/cm)、ナデ? 内:ナデ?	やや粗	良	にじみ黄褐 10YR8/3	風化のため 調整不眞隙		
26	-	024-05	弥生土器	壺	D8	SD40	-	3.2以上	-	風化のため調整不眞隙	粗	良	にじみ黄褐 10YR7/4	底部 小片		
27	19	023-01	弥生土器	壺	C10	SD4+40受点	13.3	4.3以上	-	外:口縁部に沈線、 ヨコナデ、ナデ? 内:ヨコナデ、 オサエ?、後コナデ	粗	良	灰白 10YR8/2	口縁部 1/4		
28	-	023-02	弥生土器	甕	C10	SD4+40受点	-	3.6以上	-	外:ヨコナデ、ハケ(単位不明) 内:ヨコナデ、ナデ?	粗	良	にじみ黄褐 10YR7/2	口縁部 小片		
29	-	001-05	木製品	杭	C10	SZ11木-5	現高 32.9	太さ2.6								丸太材
30	-	001-04	木製品	杭	C10	SZ11木-4	現高 27.9	太さ2.1								丸太材
31	-	001-02	木製品	杭	C10	SZ11木-2	現高 25.4	太さ2.5								丸太材
32	-	001-03	木製品	杭	C10	SZ11木-3	現高 32.5	太さ2.7								丸太材
33	-	001-08	木製品	杭	C10	SZ11木-8	現高 10.9	太さ2.9								丸太材
34	-	001-09	木製品	杭	C10	SZ11木-10	現高 16.6	太さ2.6								丸太材
35	-	001-01	木製品	杭	C10	SZ11木-1	現高 14.7	太さ1.9								丸太材
36	-	001-06	木製品	杭	C10	SZ11木-6	現高 11.3	太さ2.6								丸太材
37	-	001-07	木製品	杭	C10	SZ11木-7	現高 10.0	太さ2.5								丸太材

番号	編番	実測 番号	種類	器種等	グリ ッド	出土層位	出土遺物	測量(cm)			調査技術の特徴	出土	構成	色調	推存	備考
								口径	高さ	後傾						
38	20	024-03	土師器	壺	C14	SD41下層 灰色粗砂中	-	2.5以上	-	外:ヨコナデ、工具ナデ、 内:ハケ(單位不明) 内:ヨコナデ	やや 粗	良	灰白 10YR8/2	口縁部 小片		
39	22	024-01	土師器	壺	C14	SD41下層 灰色粗砂中	-	2.9以上	-	外:ナデ、サエ 内:ナデ	密	良	灰黄 2.5Y7/2	底部 1/8		
40	21	024-02	土師器	壺	C14	SD41下層 灰色粗砂中	-	3.0以上	-	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	やや 粗	良	にSL-1黄褐 10YR7/2	口縁部 小片		
41	-	024-04	土師器	高杯	C14	SD41下層 灰色粗砂中	-	3.5以上	-	外:ナデ 内:ヨコナデ	やや 粗	良	灰 2.5YR8/3	口縁部 のみ		
42	-	010-03	土師器	壺	B13	SD11	-	5.0以上	台傾 9.7	外:板ナデ、オサズ、ヨコナデ 内:ヨコナデ、ナデ、オサエ	やや 粗	良	灰白 2.5YR/2	台部 1/3		
43	2	010-01	土師器	壺	C13	SD11	9.4	8.5以上	-	外:ヨコナデ、丸キ? 内:ヨコナデ、ナデ	やや 粗	良	にSL-1黄褐 SYR7/3	口縁部 1/12		
44	-	010-05	土師器	鉢	C13	SD11	-	2.5以上	-	外:ヨコナデ、ナデ 内:ヨコナデ	密	良	にSL-1褐 7.5YR7/3	小片		
45	1	010-02	須恵器	壺	B13	SD11	11.9	4.5以上	-	外:回転ナデ、回転ケヅリ 内:回転ナデ	やや 粗	良	灰 NB/	1/3		
46	-	014-04	土師器	壺	C12	SR4	15.4	2.7以上	-	外:ヨコナデ、ハケ(5本/cm) 内:ヨコナデ、ハケ(5本/cm)、 オサエ、ナデ	やや 粗	良	浅灰褐 10YR8/3	口縁部 1/8		
47	-	014-03	土師器	壺	B11	SR4	15.6	3.1以上	-	外:ヨコナデ、ハケ(4本/cm) 内:ヨコナデ、サエ	やや 粗	良	にSL-1黄褐 10YR7/3	口縁部 1/10		
48	10	018-01	土師器	壺	C13	SR4	14.9	3.9以上	-	外:ヨコナデ、ハケ(4本/cm) 内:ヨコナデ、サエ	やや 粗	良	にSL-1黄褐 10YR7/3	口縁部 1/8		
49	-	016-03	土師器	壺	B12	SR4	14.4	4.4以上	-	外:ヨコナデ、ハケ(5本/cm) 内:ヨコナデ、オサエ	やや 粗	良	にSL-1黄褐 10YR7/3	口縁部 1/12		
50	-	014-06	土師器	壺	C12	SR4	-	3.3以上	-	外:ヨコナデ、ハケ(3本/cm) 内:ヨコナデ、オサエ	やや 粗	良	にSL-1黄褐 10YR7/3	口縁部 小片		
51	-	014-08	土師器	壺	C13	SR4	-	2.8以上	-	外:ヨコナデ、ハケ(3本/cm)	やや 粗	良	にSL-1黄褐 10YR7/4	口縁部 小片		
52	-	017-14	土師器	壺	C12	SR4	-	3.3以上	-	外:ヨコナデ、ハケ(單位不明) 内:ヨコナデ、ナデ、オサエ	やや 粗	良	灰黄 2.5YR/2	口縁部 小片		
53	-	014-05	土師器	壺	C12	SR4	-	2.2以上	-	外:ヨコナデ、ハケ(3本/cm) 内:ヨコナデ、オサエ	やや 粗	良	にSL-1黄褐 10YR7/3	口縁部 小片		
54	-	014-07	土師器	壺	C13	SR4	-	3.7以上	-	外:ヨコナデ、ハケ(3本/cm) 内:ヨコナデ、サエオサエナデ	やや 粗	良	灰黄 2.5YR/2	口縁部 小片		
55	-	017-08	土師器	壺	A11	SR4セクション ベルト内	-	4.5以上	-	外:ヨコナデ、ハケ(3本/cm) 内:ヨコナデ、サエオサエコナデ	密	良	灰白 10YR7/1	口縁部 小片		
56	-	014-02	土師器	壺	B11	SR4	13.7	3.8以上	-	外:ヨコナデ、ハケ(3本/cm) 内:ヨコナデ、オサエ	やや 粗	良	にSL-1黄褐 10YR7/4	口縁部 1/7		
57	-	014-01	土師器	壺	B11	SR4	14.0	3.0以上	-	外:ヨコナデ、ハケ(3本/cm) 内:ヨコナデ、オサエ	やや 粗	良	にSL-1黄褐 10YR7/3	口縁部 1/4		
58	-	017-03	土師器	壺	C12	SR4	-	5.7以上	10.1	外:板ナデ、オサズ、ナデ 内:オサエ、ナデ、ヨコナデ	やや 粗	良	にSL-1黄褐 10YR7/3	台部 1/2		
59	-	017-13	土師器	壺	C13	SR4	-	4.1以上	-	外:ナデ後板ナデ、ナデ 内:オサエ後板コナデ、オサエ	粗	良	灰黄 2.5YR/3	台部 完形		
60	-	017-04	土師器	壺	C12	SR4	-	4.3以上	7.8	外:板ナデ、オサズ 内:ナデ、ヨココナデ	粗	良	にSL-1褐 7.5YR7/4	台部 完形		
61	-	015-04	土師器	小形壺	B11	SR4	-	5.4以上	-	外:ヨコナデ、ナデ? 内:ナデ	やや 粗	良	にSL-1黄褐 10YR7/4	顎部 1/4		
62	-	016-04	土師器	小形壺	B12	SR4	-	3.8以上	-	外:ナデ? 内:ヨコナデ、ナデ	やや 粗	良	淡褐 10YR7/4	1/4	内外面共風化 進み誤認不明確	
63	-	016-06	土師器	壺	C13	SR4	14.8	4.6以上	-	外:ヨコナデ、ナデ? 内:ヨコナデ、オサエ後ヨコナデ	やや 粗	良	にSL-1黄褐 10YR7/4	顎部 1/5		
64	-	017-10	土師器	壺	C13	SR4	-	3.4以上	-	外:ナデ、ノイケナデ 内:ナデ	密	良	にSL-1小褐 10YR6/4	口縁部 小片		
65	-	017-11	土師器	壺	C12	SR4	-	2.4以上	6.0	外:ナデ、ナデ? 内:ナデ	やや 粗	良	にSL-1黄褐 10YR7/2	底部 1/2		
66	-	015-03	土師器	小形壺	B11	SR4	11.4	4.8	-	外:ヨコナデ、オサエ、ケヅリ 内:ヨコナデ、ナデ	やや 粗	良	外: 淡黄褐 10YR6/8 内: 淡黄褐 10YR7/6	1/5		
67	6	015-02	土師器	小形壺	B11	SR4	11.3	4.7	-	外:ヨコナデ、ケヅリ 内:ヨコナデ、ナデ?	粗	良	淡黄褐 10YR6/3	1/2		
68	7	015-01	土師器	高杯	C13	SR4	13.5	10.7	台傾 12.5	外:ヨコナデ、サエ後ナデ、 面凹り? 内:シシリ、ナデ、ヨコナデ	やや 粗	良	褐 SYR6/6	口縁部 4/5 1/2		
69	-	016-02	土師器	高杯	B12	SR4	15.5	11.8	台傾 12.5	外:ヨコナデ、ナデ? 内:シシリ、ナデ、ヨコナデ	やや 粗	良	灰 10YR6/2	口縁部 台傾 1/3		
70	-	017-02	土師器	高杯	B11	SR4	-	9.5以上	11.2	外:ナデ、ヨコナデ 内:シシリ、オサエ、ヨコナデ	やや 粗	良	灰黄褐 10YR6/2	面部 1/2		
71	-	017-09	土師器	高杯	C13	SR4	-	5.8以上	-	外:板ナデ 内:ナデ、ヨコナデ	やや 粗	良	灰 10YR7/1	頭上部		
72	-	017-06	土師器	高杯	B11	SR4	-	4.6以上	-	外:ナデ、シシリ、オサエ	やや 粗	良	淡黄褐 10YR6/3	頭部 1/3		
73	-	017-05	土師器	高杯	B11	SR4	-	5.0以上	-	外:ナデ、シシリ、オサエ	やや 粗	良	灰白 10YR8/2	頭部 1/3		
74	-	016-07	土師器	高杯	C12	SR4	-	5.1以上	-	外:ナデ、ケヅリ 内:ナデ	やや 粗	良	にSL-1黄褐 10YR6/3	頭部 1/4		
75	-	017-07	土師器	高杯	B11	SR4	-	2.2以上	11.4	外:板ナデ 内:ヨコナデ、ナデ	やや 粗	良	にSL-1黄褐 10YR6/3	頭部 1/5		
76	-	016-05	土師器	高杯	C13	SR4	-	2.0以上	10.0	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	やや 粗	良	にSL-1黄褐 10YR7/3	頭部 1/4		
77	-	016-01	須恵器	壺	B11	SR4	12.9	5.1以上	-	外:回転ナデ、 波状文(11本/cm) 内:回転ナデ	やや 粗	良	灰N5/ 口縁部	1/8		
78	-	002-04	木製品	木製品	C12	SR4	表面 52.7	2.1	1.3	表面						
79	-	002-05	木製品	木製品	C12	SR4	表面 29.3	2.9	1.3	表面						丸太材

報告 番号	標識 番号	実測 番号	種類	器種等	グリ ッド	出土遺構 出土地点	基準(cm)			調査技術の特徴		施土	傳成	色調	残存	備考	
							口径	断面	直径								
80	9	019-01	土師器	壺	B12	SR4下層シルト	19.6	12.1以上	-	外:ハマ後ヨナデ、ハゲ(11~12本/cm)、内:ガキ牛 内:ハマ後ヨナデ、オサエ後ナデ、 オサエ後ナデ	やや 密	にじる黄 10YR7/2	口縁~ 体部1/2				
81	-	021-03	土師器	小形壺	B12	SR4下層シルト	9.4	4.6	-	外:ヨナデ、オサエ後ナデ 内:ナデ	やや 密	にじる黄 10YR7/2	3/4				
82	-	021-05	土師器	高杯	B12	SR4下層シルト	-	1.6以上	台傾 9.4	内:ナデ	やや 密	にじる 7.5YR6/4	断面部 1/6				
83	-	030-03	土師器	壺	A11	SR4下層 セグレジンペルト 最下層	-	5.6以上	-	外:ヨナデ、ハケ(3本/cm) スズ付苔 内:ヨナデ、ナデ	稀	浅黄 10YR6/3	口縁部 1/8				
84	11	020-02	土師器	壺	B11	SR4下層 セグレジン内	13.8	5.7以上	-	外:ヨナデ、ハケ(3本/cm) 内:ヨナデ、オサエハケ 内:ナデ	やや 密	にじる黄 10YR7/3	口縁部 1/2				
85	12	018-02	土師器	壺	C12	SR4灰白色 セグレジンペルト 最下層	14.4	4.9以上	-	外:ヨナデ、ハケ(3本/cm) 内:ヨナデ、オサエ 内:ナデ	やや 密	にじる黄 10YR6/4	口縁部 1/6				
86	-	032-02	土師器	壺	C12	SR4灰白色 セグレジンペルト 最下層	13.5	4.0以上	-	外:ヨナデ、ナメケ(4本/cm) 内:ヨナデ、ナサエ	やや 密	にじる黄 10YR7/2	口縁部 1/5				
87	-	031-03	土師器	壺	C12	SR4灰白色 セグレジンペルト 最下層	14.7	4.2以上	-	外:ヨナデ、ハケ(3本/cm) 工具ナデ 内:ヨナデ、オサエ後ナデ	やや 密	浅黄 2.5Y7/3	口縁部 1/10				
88	-	030-04	土師器	壺	C12	SR4灰白色 セグレジンペルト 最下層	-	3.9以上	-	外:ヨナデ、ハケ(3本/cm) スズ付苔 内:ヨナデ、ナデ	やや 密	にじる黄 10YR7/2	口縁部 小片				
89	-	031-06	土師器	壺	A11	SR4下層 セグレジンペルト	14.3	4.0以上	-	外:ヨナデ、ハケ(4本/cm) 内:ヨナデ、オサエナデ 内:ナデ	やや 密	にじる 7.5YR6/4	口縁部 1/8				
90	-	030-01	土師器	壺	C12	SR4灰白色 セグレジンペルト 最下層	14.7	5.7以上	-	外:ヨナデ、ナメケ(3本/cm) 内:ヨナデ、ナデ	やや 密	にじる 10YR7/2	口縁部 1/4				
91	-	030-05	土師器	壺	C12	SR4灰白色 セグレジンペルト 最下層	-	5.2以上	-	外:ヨナデ、ハケ(3本/cm) 内:ヨナデ、ナデ	やや 密	褐灰 10YR6/1	口縁部 小片				
92	-	030-02	土師器	壺	A11	SR4下層 セグレジンペルト	12.9	4.7以上	-	外:ヨナデ、ハケ(4本/cm) 内:ヨナデ、ナデ	やや 密	灰白 2.5Y8/2	口縁部 1/8				
93	13	020-03	土師器	壺	B11	SR4下層 セグレジンペルト 最下層	14.6	5.1以上	-	外:ヨナデ、ハケ(4本/cm) 内:ヨナデ、ナデ 内:ナデ	やや 密	にじる 10YR7/3	口縁部 小片				
94	-	031-05	土師器	壺	A11	SR4下層 セグレジンペルト	15.0	5.5以上	-	外:ヨナデ、ハケ(3本/cm) 内:ヨナデ、ナデ 内:ナデ	やや 密	灰白 2.5Y7/2	口縁部 1/10				
95	-	020-04	土師器	壺	A11	SR4下層 セグレジンペルト	-	12.4以上	-	内:ハマメタ(4本/cm)、ケズリ オサエ後ナデナデ オサエ後ナデ	やや 密	褐灰 10YR5/1	体頭部 1/3				
96	-	031-02	土師器	壺	C12	SR4灰白色 セグレジンペルト 最下層	13.2	4.6以上	-	外:ヨナデ、ハケ(4本/cm) スズ付苔 内:ハバク(4本/cm)、ナデ	やや 密	灰白 2.5Y6/2	口縁部 1/5				
97	8	020-01	土師器	壺	A11	SR4下層 セグレジンペルト	19.1	5.6以上	-	外:ヨナデ、ナデ 内:ヨナデ、オサエ後ナデ	稀	灰白 10YR7/1	口縁部 1/4				
98	-	031-01	土師器	小形壺	B12	SR4セグレジン ベルト 最下層	12.0	4.1以上	-	外:ヨナデ、ナデ 内:ナデ	やや 密	2.5YR6/8	口縁部 1/5				
99	-	018-03	土師器	不明	C12	SR4灰白色 セグレジンペルト 最下層	10.0	3.8以上	-	内:ナデ 内:ナデ	やや 密	7.5YR6/6	口縁部 1/10				
100	-	018-05	土師器	不明	A11	SR4下層 セグレジンペルト	10.2	3.3以上	-	外:ヨナデ 内:ヨナデ	密	浅黄 10YR6/3	口縁部 1/10				
101	-	018-04	土師器	不明	B12	SR4セグレジン ベルト 最下層	10.0	5.9以上	-	外:ヨナデ、ナデ 内:ヨナデ、ハメケ	やや 密	灰白 2.5Y6/2	1/5				
102	3	020-07	須恵器	蓋	A11	SR4下層 セグレジンペルト 最下層	13.3	2.7以上	-	外:田園ナデ 内:ナデ	やや 密	灰NA/ 4NA	1/10				
103	4	020-05	須恵器	身舟	B11	SR4下層 セグレジン内	10.0	3.3以上	-	外:田園ナデ 内:田園ナデ	やや 密	褐灰 N2/	口縁部 1/8				
104	5	020-06	須恵器	身舟	A11	SR4下層 セグレジンペルト	-	2.5以上	-	外:田園ナデ 内:田園ナデ	やや 密	青灰 5S5/1	1/10				
105	-	032-01	須恵器	壺	C12	SR4灰白色 セグレジンペルト 最下層	-	5.2以上	-	外:ヨナデ 内:タキ後ナキ(8本/cm)	やや 密	灰 NS/NS 灰白 SY7/1	断面部 1/2				
106	-	003-01	木製品	平柄木製材	B12	SR4セグレジン ベルト 最下層	54.5	5.6以上	視幅 7.1	視幅 2.5	視幅 2.3					傾けあり 通査板	
107	-	003-02	木製品	神狀木製品	A11	SR4下層 セグレジンペルト	54.5	5.6以上	-	内:ナメケ					丸太材		
108	15	011-03	土師器	壺	C13	S011-SR4交叉	12.6	5.0以上	-	外:ヨナデ、ハケ(8本/cm) 内:ヨナデ、ナデ、オサエ	やや 密	浅黄 10YR6/3	口縁部 1/4				
109	-	013-06	土師器	壺	C13	S011-SR4交叉	14.0	4.3以上	-	外:ヨナデ、ナメケ(5本/cm) 内:ヨナデ、ナデ、オサエ	やや 密	7.5YR7/6	口縁部 1/4				
110	-	013-04	土師器	壺	C13	S011-SR4交叉	13.7	4.9以上	-	外:ヨナデ、ハメケ(8本/cm) 内:ヨナデ、ナデ、オサエ	やや 密	にじる 10YR7/3	口縁部 1/8				
111	-	013-05	土師器	壺	C13	S011-SR4交叉	16.9	3.4以上	-	外:ヨナデ、ナメケ(5本/cm) 内:ヨナデ、ナデ、オサエ	やや 密	にじる 10YR6/4	口縁部 1/8				
112	16	011-04	土師器	壺	C13	S011-SR4交叉	16.4	4.3以上	-	外:ヨナデ、ナメケ(7本/cm) 内:ナデ	やや 密	浅黄 10YR6/3	口縁部 1/8				
113	-	013-01	土師器	壺	C13	S011-SR4交叉	-	5.0以上	台傾 11.3	内:オサエ後ナデ	やや 密	にじる 10YR7/2	台傾 のみ				
114	-	012-07	土師器	壺	C12	S011-SR4交叉	-	3.7以上	-	外:ヨナデ、ナメケ(8本/cm) 内:ナメケ後ヨナデ、ケズリ	やや 密	7.5YR6/4	口縁部 小片				
115	-	012-06	土師器	壺	C12	S011-SR4交叉	-	3.2以上	-	外:ヨナデ 内:ヨナデ	やや 密	にじる 7.5YR7/4	口縁部 小片		難滅大		
116	-	012-08	土師器	不明	C13	S011-SR4交叉	-	4.4以上	-	外:ヨナデ 内:ナメケ、ナデ 内:オサエ後ナデ	やや 密	褐 10YR6/6	口縁部 小片				
117	-	012-04	土師器	壺	C12	S011-SR4交叉	-	2.8以上	5.1	内:工事による調査後ナデ	稀	浅黄 7.5YR6/8	東側 のみ				
118	-	013-03	土師器	高杯	C13	S011-SR4交叉	13.6	6.7以上	-	外:面刷、ヨナデ 内:ナメケ、ナメケ化粧い	やや 密	7.5YR7/2	口縁部 1/2				
119	-	012-05	土師器	高杯	C12	S011-SR4交叉	-	7.1以上	-	外:面刷、ヨナデ 内:ナメケ、ナメケ	やや 密	にじる 7.5YR6/4	面柱部 のみ				

件名	番号	実測 番号	種類	種類等	グリ ッド	出土遺構 出土位置	法面(2m)			調整技術の特徴		地土	成土	色調	推存	備考
							口径	壁高	底径	内・外	内・外					
120	-	012-03	土器部	高杯	C13	SD11-SR4交点	-	6.3以上	-	外:風化大で削取り 底のみ少し落ち 内:ナデ、シボリ	粗	良	にじむ黄 SYR7/3	脚柱部 のみ		
121	-	013-02	土器部	高杯	C13	SD11-SR4交点	-	5.3以上	-	外:ナデ、工具による跡巻 内:シボリ、ナデ	やや 粗	良	にじむ黄 7SYR7/4	脚柱部 のみ		
122	17	011-01	須恵器	杯身	C12	SD11-SR4交点	11.4	4.9	-	外:ロクロダニ、ロクロケズリ 内:ロクロダニ	やや 粗	良	灰 NS/	完形		
123	-	011-02	須恵器	高杯	C12	SD11-SR4交点	12.2	3.6以上	-	外:ロクロダニ 内:ロクロダニ	粗	良	灰 NS/	口縁部 1/8		
124	-	003-03	木製品	杭	B12	SR4-SD1交点	表面	14.8	径3.6							丸太材
125	-	025-02	土器部	高杯	B13	灰色色斑 SD11(以下層)	-	7.2以上	-	外:ナデ 内:シボリ	やや 粗	良	にじむ黄桂 10YR8/3	脚柱部 のみ		
126	-	026-10	土器部	小形杯	A12	風化シルト SR4(裏側外)	-	3.2以上	-	外:ヨコナデ、ハギキ 内:毛毛	やや 粗	良	にじむ黄桂 10YR7/3	口縁部 小片		
127	-	026-06	土器部	甕	B12	セクションベルト内 SR4(裏側外)	-	3.2以上	-	外:ヨコナデ、ハケ 内:ヨコナデ、オサエ ナデ	やや 粗	良	にじむ黄桂 10YR7/2	口縁部 小片		
128	-	028-08	土器部	甕	B12	セクションベルト内 SR4(裏側外)	6.8	2.3以上	-	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ、オサエナデ	やや 粗	良	にじむ黄桂 10YR7/3	口縁部 1/8		
129	-	026-07	須恵器	甕	B12	セクションベルト内 SR4(裏側外)	-	1.8以上	-	内:ヨコナデ	粗	不良	灰 SY6/1	口縁部 小片		
130	14	012-01	弥生土器	甕	C12	SD11-SR4交点	22.0 ~30.0	2.8以上	-	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ、ハケ(6本/cm) 内:ヨコナデ	粗	良	にじむ黄桂 10YR7/3	口縁部 小片	真時期のため 包含層無い	
131	-	028-07	弥生土器	甕	B14	包含層	-	1.7以上	-	内:ヨコナデ 外:口縁部に瘤状突起、孔、洞 内:ヨコナデ	粗	良	にじむ黄 7SYR7/3	口縁部 小片		
132	-	021-07	弥生土器	甕	B12	SR4北 セクションベルト	17.0	1.8以上	-	内:削り立点文、ナデ、班ナデ 内:ナデ	粗	良	にじむ黄 7SYR7/3	口縁部 小片	真時期のため 包含層無い	
133	-	017-12	弥生土器	甕	C13	SR4	-	2.2以上	-	瘤状のため調整不明	粗	良	外:灰SY5/1 内:灰白 SY7/2	口縁部 小片	真時期のため 包含層無い	
134	-	021-09	弥生土器	甕	B13	SR4続きセクション ベルトより下層	-	3.4以上	-	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	やや 粗	良	灰黄褐色 10YR8/2	口縁部 小片	真時期のため 包含層無い	
135	-	010-04	弥生土器	甕	B14	SD11	17.4	5.8以上	-	外:ヨコナデ、ハケ、 ナデ、ナラ、オサエ 内:ヨコナデ、ハバ(5本/cm)	粗	良	外:灰白 10YR7/1 内:灰白 7SYR7/2	口縁部 1/8	真時期のため 包含層無い	
136	-	026-09	弥生土器	甕	A12	風化シルト SR4(裏側外)	-	3.2以上	-	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	やや 粗	良	灰白 2SY8/2	口縁部 小片	真時期のため 包含層無い	
137	-	012-02	弥生土器	甕	C12	SD11-SR4交点	-	3.6以上	6.5	外:ナデラフ	粗	良	にじむ黄桂 10YR8/3	底部 膨張部	膨張部 のため包含層無い	
138	-	017-01	弥生土器	甕	B12	SR4	-	4.3以上	6.1	外:毛毛、ナデ 内:ヨコナデ	粗	良	にじむ黄桂 10YR7/2	底部 膨張部	真時期のため 包含層無い	
139	-	028-06	土器部	甕	B14	包含層	16.2	3.2以上	-	外:ヨコナデ、ハケ(4本/cm) 内:ヨコナデ、ナデ	やや 粗	良	灰 2SY8/3	口縁部 1/8		
140	-	021-04	土器部	甕	B13	SR4続き 砂輪上	-	3.9以上	-	外:ヨコナデ、ハケ 内:ヨコナデ、ナデ 外:ヨコナデ、オサエ後ナデ	やや 粗	良	にじむ黄 7SYR7/4	小片		
141	-	021-06	土器部	甕	B13	SR4続きセクション ベルトより下層	-	4.6以上	11.8	台盤 外:ナデラフ、オサエ、ヨコナデ	やや 粗	良	灰黃褐色 10YR8/2	台盤 1/5		
142	-	021-08	土器部	甕	B13	SR4続きセクション ベルトより下層	-	3.8以上	5.0	外:ナデ 内:ナデ	粗	良	赤褐色 10R6/6	底部 1/4	風化大	
143	-	028-03	土器部	甕	C12	セクションベルト 内:ヨコナデ	-	2.8以上	-	内:ナデ、風巻あり	やや 粗	良	にじむ黄桂 10YR7/2	口縁部 小片		
144	-	028-02	陶器	山茶碗	C12	包含層	15.8	3.9以上	-	外:ロクロダニ、自然鉢 内:ロクロダニ	やや 粗	良	灰 SY7/1	口縁部 1/8	尾張産	
145	-	028-05	土器部	高杯	C12	セクションベルト 内:ヨコナデ	-	5.8以上	-	外:風化で調整不明 内:ケラス	やや 粗	良	灰 SYR6/6	上部 のみ		
146	-	028-01	土器部	高杯	C12	セクションベルト 内:ヨコナデ	-	4.1以上	-	外:ナデ 内:ナデ、シボリ	やや 粗	良	灰黃褐色 10YR8/2	上部 のみ		
147	-	028-02	土器部	高杯	C12	セクションベルト 内:ヨコナデ	-	3.0以上	-	外:ナデ 内:シボリ	粗	良	灰白 2SY7/1	上部 のみ		
148	-	021-01	土器部	高杯	B13	SR4続きセクション ベルトより下層	-	4.4以上	6.0	外:ナデ、オサエ、ハケ後ナデ 内:シボリ	粗	良	にじむ黄 7SYR7/4	脚部 上半		
149	-	021-02	土器部	高杯	B13	SR4続き 砂輪等	-	2.4以上	12.8	台盤 外:ナデ 内:シボリ	粗	良	にじむ黄 7SYR8/4	脚部 1/4		
150	-	029-01	須恵器	瓶蓋	A13	SR1	13.8	3.8以上	-	内:ロクロナデ、ロクロケズリ	やや 粗	良	灰 NB/1		真時期のため 包含層無い	
151	-	028-03	陶器	山茶碗	C14	包含層	16.2	3.1以上	-	内:ロクロダニ、自然鉢	やや 粗	良	灰 SY7/1	口縫部 1/8	尾張産	
152	-	028-08	陶器	山茶碗	B6	包含層	-	4.3以上	-	内:ロクロダニ	やや 粗	良	灰 7SYR7/1	小片	尾張産	
153	-	008-03	陶器	山茶碗	B6	SK19	-	4.3以上	6.0	外:ロクロナデ、高台貼付ナデ 内:ロクロナデ	やや 粗	良	灰白 SY7/1	小片	山系統の小範タイプ のものか 真時期のため包含層無い	
154	-	028-04	陶器	山茶碗	B14	包含層	-	3.4以上	6.2	外:ロクロダニ、自然鉢 内:ロクロダニ、重ね模様	やや 粗	良	灰 7SYR7/1	底部 1/5	尾張産	
155	-	028-01	陶器	山茶碗	B13	包含層	-	2.9以上	7.6	外:ロクロダニ、高台貼付ナデ 内:ロクロダニ	粗	良	オーリーブ灰 2.5GY6/2	底部 1/4	尾張産	
156	-	028-05	陶器	天目 茶葉	B6	包含層	-	3.8以上	4.8	外:鐵青、ロクロケズリ 内:鉄青	やや 粗	良	紺 7SYB/1 紺 オーリーブ灰 SY7/1	高台 完形	葛戸戸茶道	

V 自然科学分析

1 分析の目的

萬²進歩(第4号)では、SK18・19の土壤分析とSR4・SD4岩から採取した土壌についての分析を行った。

土壤分析については、SK18・19に「岩や砂質品など」として利用されていたことを直接的に示す資料はないものの、其の上器質を「器質」としていたり、岩の墨字で成る「岩」に「リン・カルシウム分析」して、過剰溶解の有無を検定することとした。

分析対象については、SR4やSD4といった土壌時代や後醍醐天皇の治政・河から採取した木製品や生漆漆木により、萬²進歩(第4号)に記載する等報を得ることとして実施した。

なお、この分析結果は萬²進歩(第4号)に記載した。パリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。

(小林)

2 土壤分析

(1) 試料

採取が実施された遺構は、SK18とSK19である。SK18は、長船うち約2.1m、短船うち約1.2m、3種類のプランがU字形を呈する土壌である。遺構検査から歴史までの遺構深度は約0.1m程度である。SK19は、長船うち約1.4m、短船うち約0.9m、3種類のプランがU字形を呈する土壌である。遺構検査から歴史までの約0.1m程度を計る。

試料は、SK18、SK19とともにブロック状の試料として、遺構(No.1)、遺構中段(No.2)、遺構上段(No.3)から3点(計6点)が採取された。このブロック状に採取された試料の上部、すなわち遺構表面部分について分析用土壌を切り取って分析試料とした。いずれの試料も灰オーリーブ色を呈した砂壤土(SL:粘土0~15%、シルト0~35%、砂65~85%)からなる。なお、土壌はマンセル色を基に構成した新規標準色において、土壌は塗膜をハンドブックの野戸色に準じる。

(2) 分析方法

今後測定する成分は、特に鉱物の鉄鉱石や岩に多く含まれるリン酸の含量測定を行う。リン酸も岩に多く含まれ、土壤に蓄積されやすい性質を持つ。そのため、過剰が溶解されると土壤にリン酸の漏れが認められることから、過剰あるいは過剰の量を増加することができる。また、リン酸の鉄鉱石としては鉄鉱石もあげられる。鉄鉱石のリン酸含有量が高められた場合、リン酸含有量よりも腐殖含有量が高くなる。そこで、地盤の影響を調べるために腐殖含有量も測定する。

リン酸は硫酸・過塩素酸を用いてバナドモリブデン酸-ビニル酸、腐殖含有量はチューリン法でそれぞれ測定する。³以下に各項目の具体的な操作手順を示す。

試料を風乾後、粗く粉碎して2.00mmの網を通過させる(風乾後試料)。風乾後試料の内、それを加熱減圧法(105°C、5時間)により脱水する。風乾後試料の一部を粉碎し、0.5mmの網を全通させる(粉碎試料)。

風乾後試料2.00gをケルダール分解フラスコに移動し、硝酸鈉5mlを加えて加熱溶解する。次に冷後、過塩素酸約10mlを加えて再び加熱溶解を行う。分離後、水で100mlに定容してろ過する。ろ液の一定量を試験管に移し、リン酸鉄を鉄を加えてお湯煎によりリン酸(P.O.)濃度を測定する。この測定値と加熱減圧法で求めた水分から乾燥あたりのリン酸含有量(P.O.mg/g)を求める。

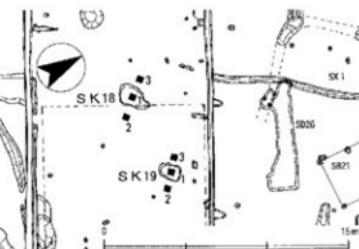


図22a 試料採取位置(1:300)

また、試料は試料0.100～0.500 gを100mLのフラスコに正確に秤りとり、0.4Nクロム酸・草酸混浴10mLを正確に加え、約200°Cの砂浴上で正確に5分間煮沸する。冷却後、0.2%フェニルアントラニル染液を増溶液に0.2N硫酸第1鉄アンモニウム浴で滴定する。滴定終点および熱減量法で求めた熱減量から乾燥あたりの有機物含量(ORG-C乾燥%)を求める。これに1.724を乘じて腐植合量(%)を算出する。

(3) 稲葉

結果を第7表に示す。SK18では、腐植合量が0.54～1.03%、リン含有量が1.51～1.86P.0mg/gを示す。試料3は、芦の試料よりもリン含有量がやや高いが、腐植合量も年々なる傾向を示す。

SK19では、腐植合量が0.60～0.76%、リン含有量が1.18～1.33P.0mg/gを示す。腐植合量、リン含有量とも試料間に有意差はほとんど認められない。

(4) 香川

土壤に含まれるリン含有量、いわゆる土壤磷についてはBowen⁶、Bolt & Bruggenwert⁷、久野ほか⁸、川崎ほか⁹などの甲斐がある。これらの測定から推定されるリン含有量の測定誤差の上界は約3.0P.0mg/g程度である（なお、土壤中の鉛鉄等が異なるため、ここではすべてP.0mg/gで統一している）。したがって、これらの値を基準とした測定では、外的因子（おそらく測定誤差によるもの）によるリン含有量の誤差が増幅できる。しかし、今回の測定試料では、いずれも上記した測定誤差の上界を上回る試料がみられない。

一般的に土壤の腐植合量は、生漆状態において腐植状態を仄とうとするため、均一になる必要がある。しかし、不均一な燃焼が行われると、場所によって生成にばらつきが生じることが知られている¹⁰。今回の試料でみると、SK18は、試料3で最もリン含有量が高い値を示すが、同時に腐植合量も傾向がある。つまり、ここでのリン含有量は、土壤腐植、つまり燃焼の影響を受けている可能性がある。一方で、SK19では、腐植合量およびリン含有量とともに試料間のバラツキが小さい。

以上のことから、今回の土壤腐植合量からは、SK18、SK19とも、試料部分に過剰が燃焼されていた痕跡をえないだけできせず、蒸留として利用されていたか検定することができない。ただし、過剰が砂を多く含み、糞を直接しくくい必要であることを考慮すると、リン含有量が検定されず、過剰や糞などに決して可能性もある。

（パリノ・サーヴェイ株式会社 予備実行 会社
様）

3 木材の樹種同定

(1) 試料

試料は、SR4の純粋とされる済、SD4、SR4とSD4のを対比し、SD4とSD40のを対比から得られた¹¹塗木15点（試料番号1-15）である。また、芦に下層泥炭から得られた¹²塗木1点（試料番号16）もあり、合計点数は16点である。なお、清流樹種は¹³山から学名時代、上層から学名時代の樹種が同じしている。

造構	番号	位置	土性	土色		腐植合量(%)	P ₂ O ₅ (mg/g)
				1	2		
SK18	1	造構内	SL	5Y4/2	灰オリーブ	0.54	1.52
	2	造構南側	SL	5Y4/2	灰オリーブ	0.77	1.51
	3	造構北側	SL	5Y4/2	灰オリーブ	1.03	1.86
SK19	1	造構内	SL	5Y4/2	灰オリーブ	0.60	1.18
	2	造構南側	SL	5Y4/2	灰オリーブ	0.65	1.32
	3	造構北側	SL	5Y4/2	灰オリーブ	0.76	1.33

注1)土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色（農林省農林水産技術会議監修、1967）による。

注2)土性：土壤調査ハンドブック（ペドロジスト懇談会編、1984）の野外土性による。

SL…砂壤土（粘土0～15%、シルト0～35%、砂65～85%）

(2) 分布形況

ヨリのアモリ（横断面）・板ヨリ（横断面）の3断面の後アモリを压裂し、ガム・クロラール（ガムクロラール、アラビアゴム珍味、グリセリン、菓物の混合物）で封じし、プレバーラートを封する。封裂したプレバーラートは、当時供給範囲で吹き足底で現れる。その外側から毎年を記す。

(3) 種属

梅雨は前頭を第8番に示す。リホトは、アカマツ2種類（モミ属・スギ）とヒノキ属7種類（ヤナギ属・コナラ属アカガシ属・タダジイ・エノキ属・ヤブツバキ・ツタ属・イボタノキ属）と種類の標記等の経歴等を記す。

・モミ属 (*Abies*) マツ科

吹き足底は吹き足底のみで構成され、実部から吹き足底への移行は一般的に穏やかで、吹き足底の増は無い。吹き足底は天記地のみで構成され、天記地は短く、じゅうぶん落葉が認められる。分野形ではスギ型で1分野に1-4倍。吹き足底はリホト、1-15度地。

・スギ (*Cryptomeria japonica* (L.f.) D.Don)

スギ形スギ属

吹き足底は吹き足底と屋根地で構成され、吹き足底の実部から吹き足底への移行はやや急で、吹き足底の増は無い。屋根地はほぼ吹き足底に累って認められ

れる。吹き足底は天記地のみで構成され、天記地の層は薄らか。分野形ではスギ型で、1分野に2-4倍。吹き足底はリホト、1-15度地。

・ヤナギ属 (*Salix*) ヤナギ科

試算は合計1.5cmの木本だ。主として、木幹は認められない。木芯部に落葉が認められることから、木幹と見えられる。根アモリで、道管はリホトまたは2-3倍が複合して、木幹全体にはほぼ一様に存在する。道管は、リホトを有し、リホトは木幹となる。吹き足底は木幹、リホト、1-15度地。

・コナラ属アカガシ属 (*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*) ブナ科

吹き足底で、管壁厚はリホト～多く、横断面では横円形、リホトで吹き足底に配列する。道管はリホトを有し、リホトは木幹となる。吹き足底は木幹、リホト、1-15度地のものと複合吹き足底がある。

・タダジイ (*Castanopsis cuspidatavar. sieboldii* (Makino) Nakai) ブナ科シノキ属

葉アモリ吹き足底で、アモリ部は横断面に溝な3-4列、アモリ内で落葉に管壁を減じたのち、溝減しながら葉落葉に配列する。道管はリホトを有し、リホトは木幹となる。吹き足底は木幹、リホト、1-20度地。

・エノキ属 (*Celtis*) ニレ科

葉アモリで、アモリ部は2-4列、アモリで落葉に管壁を減じたのち溝減、既次に複合し横溝・吹き足底の放散をなす。道管はリホトを有し、リホトは木幹、

番号	地区	造構	ラベル	樹種
1	B13	SR4のつづき 砂層以上	セクションベルト	ツバキ属
2	C10 SD4	木-9		コナラ属アカガシ属
3	B12	SR4-SD4交点		スギ
4	B12	SR4-SD4交点		ツタ属
5	B12	SR4-SD4交点		タダジイ
6	B12	SR4-SD4交点		スギ
7	B12	SR4-SD4交点		スギ
8	B12	SR4-SD4交点		スギ
9		SR4-SD4交点		エノキ属
10	C10	SD4-SD40交点		ヤナギ属
11	C10	SD4-SD40交点		イボタノキ属
12	C10	SD4-SD40交点		ツタ属
13	C10 SD4	木-11		モミ属
14	C10	SD4-SD40交点		コナラ属アカガシ属
15	C10	SD4-SD40交点		コナラ属アカガシ属
16	D12	SR13	下層流路の埋土No.2	モミ属

・逆管付根にはらせん根が認められる。次に逆管は乳化、1-8乳管、1-50乳管で、乳管が認められる。

・ヤブツバキ (*Camellia japonica* L.) ツバキ
キツツバキ属

歌アゲで、葉脈は薄く、模様では多角形～角張った形となり、葉の上部および2-3脉が結合して歌なし、葉縁からかかって茎を遮断させる。逆管は乳管を有し、葉の上部には乳管～乳管状となる。次に逆管は乳化、1-2乳管、1-20乳管で、時に二つに逆管する。次に逆管には扁乳管が認められる。

・ツタ属 (*Parthenocissus*) ブドウ科

歌アゲで、葉の上部は1-2乳管、葉の下部で怎様あるいは緩やかに葉脈を減じる。葉の下部でも小脈の逆管が存在することがある。葉の下部の逆管は、葉脈または2-4脉が被覆されまたは葉脈に複合して配列し、葉縁からかかって茎を遮断する。逆管は乳管を有し、葉の上部には乳管状となる。次に逆管は乳化、4-8乳管、100乳管など。

・イボタノキ属 (*Ligustrum*) モクセイ科

歌アゲで、逆管は乳化または2-3脉が結合して歌なし、葉縁からかかって茎を遮断させる。逆管は乳管を有し、葉の上部には葉状に配列、逆管は葉にはらせん根が認められる。次に逆管は乳化、1-2乳管、1-20乳管。

(4) 痕跡

今りの溝進植物から目立った跡は、針葉樹のモミ属・スギ属、広葉樹のヤナギ属・アカガシ属・スダジイ・エノキ属・ヤブツバキ・イボタノキ属、ツルサ木のツタ属の9種類に認められた。この中ではスギが4種、アカガシ属3種と一般的な多かった。

これらの植物のうち、アカガシ属・スダジイ・ヤブツバキはモミ属・スギ属・ヤナギ属・アカガシ属・スダジイ・エノキ属・ヤブツバキ・イボタノキ属・ツルサ木のツタ属の9種類に認められた。エノキ属・ヤナギ属は浮遊植物を構成するものであり、ツタ属は林木から林木に生育する種類である。また、モミ属には現在までモミ・ウラジロモミ・アオモリトドマツ・シラベなどの種類が存在するが、モミ以外の種類は浮遊植物から林木に分布している。したが

つて、ここでモミ属は、アカガシ属など漂移樹木群うことから、モミ属から浮遊植物にかけて分布するモミに認定される可能性が高い。モミは軽便性が強いため角質など比較的多くの器官に含有する傾向がある⁹。今後最も多発したスギは、一般的な交換の良い場所に生育する。

以上の溝進植物および木の利根構成、および主進路の沖渠流から、主導の進歩性がモミ属の多く後に属していたことが推定される。常緑针葉樹やスギなどが模倣の主導や既存地に分布していたことが推定されるが、どのような形態を形成していたかは特定できない。今後、芦粉層や利根進化などの形態を調査し、総合的にモミ属について検討する必要がある。

一方、飛沫流から目立った跡は、針葉樹のモミ属に認められた。モミ属林を構成するモミ属が飛沫層であるモミに認定される可能性がある。

以上、溝進植物および飛沫流から目立った主進路の利根性を示す飛沫層を行った結果、溝進植物が形成された主導はモミ属の種類が飛沫をしていったことが確定された。また、モミ属・スギといったモミ属・スギの存在は、主導のモミを育てる上で耕作深い傾向である。確認したようにモミ属・スギの種類はモミ属の部から冷温带部にかけて分布する種類であるが、主導は温帶の種類と飛沫をしていた可能性もある。今後、芦粉・種子などの種類による分野による検定が必要である。

(パリノ・サーヴェイ株式会社 楠橋 駿)

[註]

①風林草木研究会編著『森林生態系研究新動向』(有斐閣、1967年)。

②ペドロジスト聖誕会編『土壤学ハンドブック』(有斐閣、1984年)。

③『土壤学』(山本良介編著『土壤学』(有斐閣、1981年))。

④Bown, R.J.M.『Environmental Chemistry of Elements』(1979年)。【英文版】・李平義訳(原)『環境元素』一冊系の新規とリテラシー』(有斐閣、1983年)。】

⑤Bell, G.H. and Bruggenwert, M.G.M.『SOIL CHEMISTRY』(1976年)。【英語版】・三輪泰子訳・大川忠也・岸 一郎訳著『土壤の化学』(笠置出版センター、1980年)。】

⑥大井伊里・木村 勲・藤井 伸・吉田 勉『モミのモミモミ研究』(農業技術出版社、1988年)。

⑦川島 勝・木村 勉・吉田 勉『モミモミのモミモミ研究』(農業技術出版社、1991年)。

⑧川島 勝・木村 勉・吉田 勉『モミモミのモミモミ研究』(農業技術出版社、1991年)。

の形態統計学」(風林内官室風林内官室研究会編『三葉樹種リンの形態統計学』1991?)。

⑧例えば、木下寛道「東北地方の街津體と所詮」(『東北学ジャーナル』386、1995?)や佐藤秀二「東北形態消滅の生態学的考察」(都立大学環境整備研究会『環境研究2』都立大学環境整備研究会編『環境研究2』1992?)など。

⑨久須 繁一『東北大學』一卷発行編一』(卯倉書店、1964?)。

VI 調査のまとめと考察

1 確認された遺構

萬^リ 進歩(第4章)では、進みの跡を^リの間の部分の跡^リであり、種も非常に長い跡^リであった。しかし、進みの跡^リの耳^リは、耳^リの意^リでは非常に大きな意義^リを持つ跡^リであった。第1～3次^リの報^リ者(「第1～3次^リの報^リ者」と呼^リ)に算^リで新たに明^リしたことを時代^リに記す。

下層遺構 進みの跡^リでは、進歩の耳^リが報^リされており、耳^リを耳^リが難^リで時代^リの形^リと想定^リされていた。

今^リの跡^リでは、跡^リを耳^リ部のC・D12～13^リの飛^リで、S R 12・13の2^リの^リ飛^リを確認^リした。このうちS R 13は、跡^リの状況からおそらく耳^リを耳^リに難^リするものだろうと判断^リできた。

また、跡^リを耳^リ部の^リ飛^リでは、新たに3^リの^リ飛^リ(S R 14・15・16)の存在も明らかにな^リった。

弥生時代 進みの跡^リで検出^リされていたS D 4やS R 1の^リ飛^リを確認^リした。S D 4は、想^リを通りに進みのC^リからD^リまで延^リすることを確認^リした。S R 1は、今^リの跡^リを^リ飛^リで飛^リが^リることが確認^リされ、^リを^リく^リのような^リ形^リであることが明^リした。

また、今^リは3^基の^リ手^リを確認^リし、^リである^リ形状^リを考慮^リして^リ象^リ分析^リを行^リたが、種類^リ的に^リは^リある^リと^リ思^リえる^リ頭^リを^リすることはできなか^リった(第V章参考)。

なお、S D 3の^リ飛^リは、今^リの跡^リでは検出^リされなか^リった。

古墳時代 進みの跡^リで検出^リされていたS R 4やS D 11の^リ飛^リを確認^リした。なお、S D 10(S D 4の^リ上^リ)については確認^リされなか^リった。

飛鳥・奈良時代 今^リの跡^リでは確認^リされなか^リった。進歩もまったくないため、この当^リの遺構は第3次^リのE^リのみでしか見られないのだろう。

鎌倉時代 今^リの跡^リでは確認^リされなか^リった。

ただし、進歩には「茶塙の耳^リ」が見られる。耳^リのことを考慮^リすると、進みの跡^リで見られるよう^リ萬^リ 進歩全^リに遺構の広がりがあったことが考えられる。

2 弥生時代集落の様相

萬^リ 進歩における季^リ当^リ集落の構成について、第1～3次^リの報^リ者においてもまとめられている。今^リの跡^リを^リでも季^リ当^リの^リ飛^リで^リて^リ耳^リも検出^リされ、周辺には多くの季^リ当^リ遺構もある。ここでは季^リ当^リ跡^リについて、今^リの跡^リを^リ成^リえ、進みの跡^リの遺構についても検討^リしたい。

土坑 今^リの跡^リでは、3^基の季^リ当^リ跡^リの^リ手^リを検出^リした。^リ一般的^リな^リ器^リが^リしたため、^リ手^リには^リは^リである^リ可能性^リを^リえていた。しかし、^リ手^リの^リ頭^リからは、種類^リ的に^リは^リとは^リい^リ難^リい^リという^リ頭^リが^リている(第V章参考)。

このような^リ手^リについては、「^リ形^リに近い^リ器^リの耳^リから^リ埴^リと^リ堆^リが^リな^リされることがあるが、季^リ当^リ跡^リには^リ器^リを^リ手^リに^リは^リれることはまれである。したがって、遅^リに^リ形^リに近い^リ器^リが数個^リ検出^リするような場合は^リは^リと^リは^リ定^リを^リ行^リうべき^リであろう」との指摘^リがある^リ。これを踏まえると、萬^リ 進歩のS K 18・19における^リ手^リの^リ頭^リは^リ解^リできるものとなる。

したがって、萬^リ 進歩S K 18・19は^リは^リでない^リ形状^リが^リい^リだ^リ。S K 18・19の周辺にはS K 5～8が遺^リした場所^リにあるが、規模^リや^リ跡^リの^リ元^リでS K 18・19に傾^リしているため、^リ手^リに^リは^リではない^リ形状^リが^リい^リだ^リ。

溝 萬^リ 進歩では、季^リ当^リの^リ一般的^リな^リ溝^リとして、今^リの跡^リでも検出^リされたS D 4とS R 1がある。S D 4については第III章でも述べたように^リ馬^リ穴^リに^リ下^リを残^リすが、S R 1は^リ跡^リの^リ元^リである。

S R 1は若^リ溝^リに^リ沿^リつた形^リで、^リを^リく^リのような^リ形^リをして^リいる。つまり、^リ形^リに^リ合^リわせて^リ作^リられ

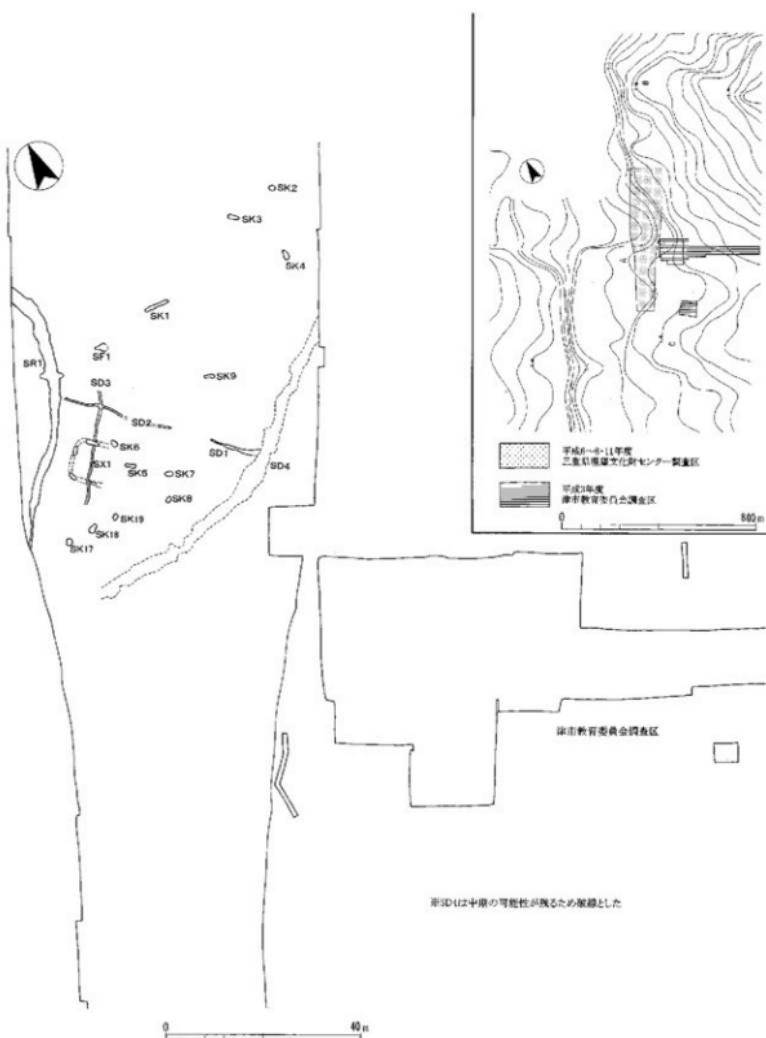


図23b 稲葉山付近の調査地図 (1:1,000)・調査地図 (1:20,000) [註①より]

た溝であることがわかる。このSR1よりも先頭は流形的に高い部分であり、集落の中心は渓谷より河原に存在することが考えられるだろう。

SD1・2については、第1～3次報告書では島田城と糸城とを並べる溝であることが指摘されているが、前述の二弟や傍流の勢力の検討結果から、この溝の構成については島田城と糸城を並べるものと判断することはできないだろう。

小結 番号追跡では、李三郎代・卯の追跡は第2次渓谷C渓谷や第4次渓谷に集約する。つまり、SR1の隣辺という空間に追跡が存在すると見えるだろう。また、SR1のありかたや流形的なことを考慮すると、今後の渓谷での丸澤(現在の丸沢村・守岐村附近)に集落の中心があったことが推測できよう。

この番号追跡がある安瀬川・浜流域では、李三郎代・卯には特定の集落と見られる鉛所追跡がある。これを中心に番号追跡や、その手前の安瀬川沿いには

禁ノ木追跡・式ノ津追跡がある。また、やや少しには松ノ木追跡(弓形猪高基・糸城)、森ノ又追跡(ベリニ直城)といった追跡があり、特定の集落と衝突的集落といった構造、また別の集落とは途切れた連絡道を復活にするといった状況までもらうことができる。この状況がわかる例は三重県では少なく、乳山市である。安瀬川・浜流域ではその後、伊那勝義には大手の堅穴邑居を焼却した長追跡、小堀追跡が見られてくるが、これらは傍流には鉛所追跡の乱退に合わせて、多くに陥没する。番号追跡はそのような安瀬川・浜流域における芦原いたずら郡時代を彩った一葉であったと評価できよう。

(4. 枝)

【註】

- ①三重県農業技術センター「番号追跡結果報告」(1999?)。
- ②三重県農業技術センター「番号追跡における李三郎代の構成」(『番号追跡(第5回)～第8回)』発表講演稿)』、2007?。

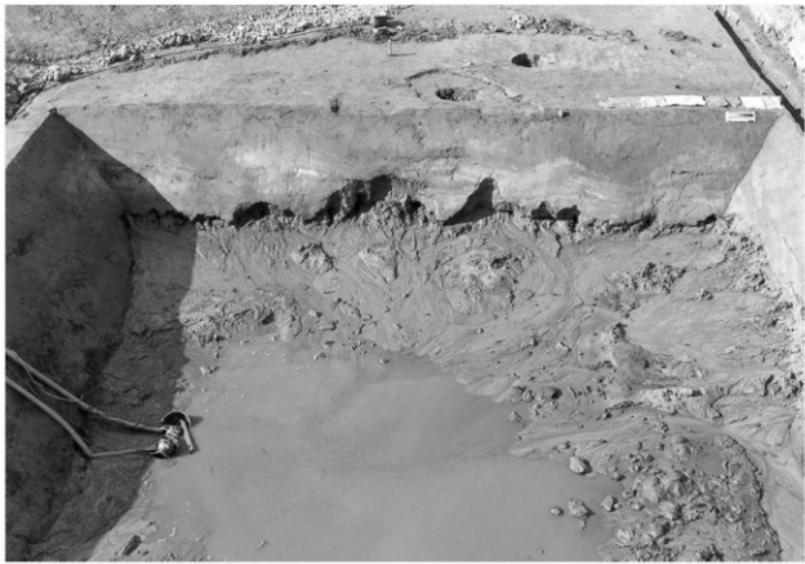
写 真 図 版



開発工事場（右から）



S R14 [2 層剥離断面 2 層] (西から)



[2 層剥離断面 2 層] (東から)



S R 12・13、S D 41 金剛(金から)



金剛(金から)



金剛(金から)



金剛(金から)



S K17 退き土器 汎(矢から)



S K18 退き土器 汎(矢から)



S K19 退き土器 汎(矢から)



S K 18^号 烟火沟(北から)



S K 19^号 烟火沟(東から)



S D4: 唇溝谷(向から)



S D4追跡谷(向から)



S D40(向から)



S Z 11(山から)



S R 1(山から)

写真8



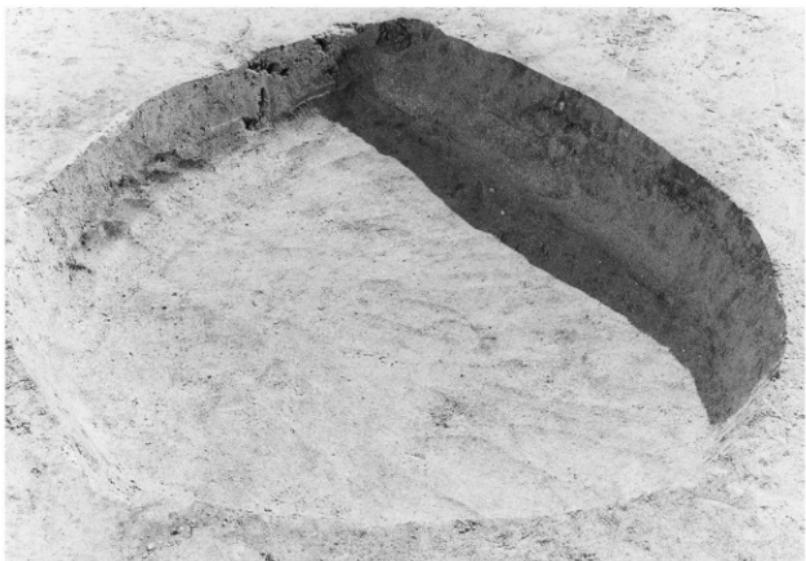
S D11・S R4・S D4
モルタル弾(火)から)



S D11・S R4・S D4
モルタル弾(火)から)

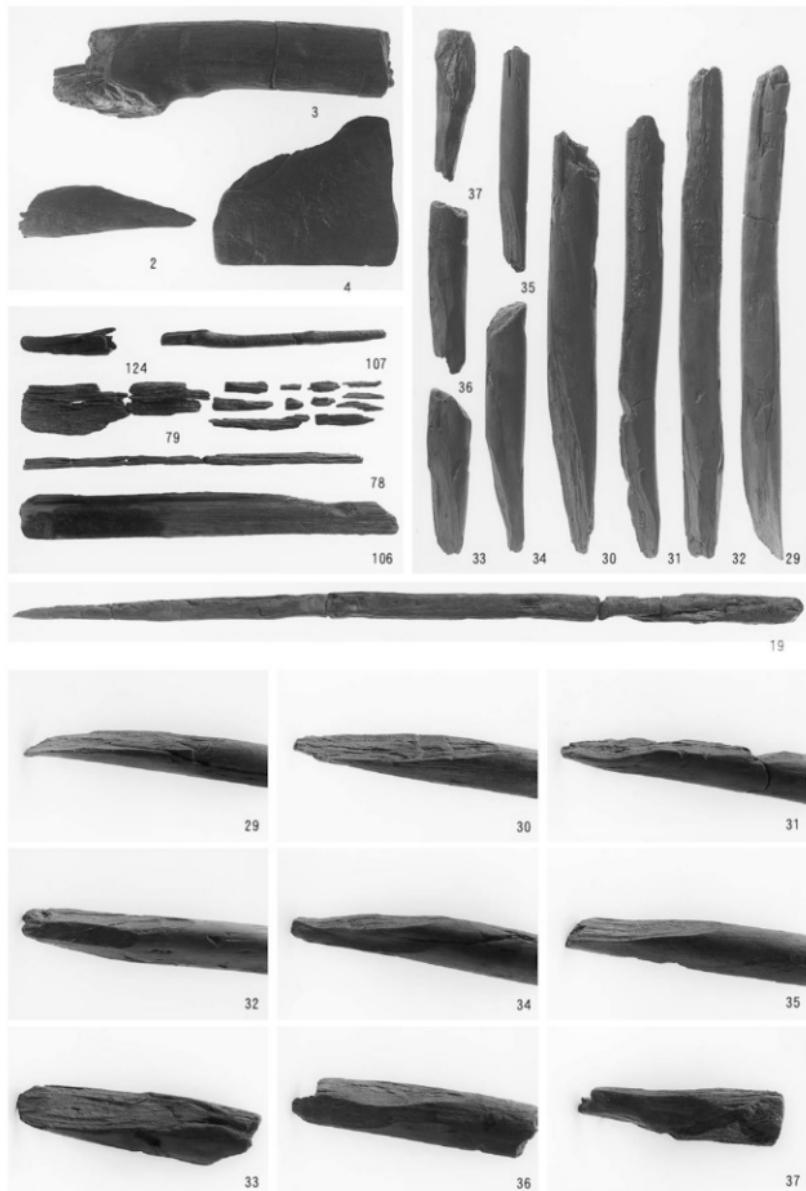


SK 20(裏から)

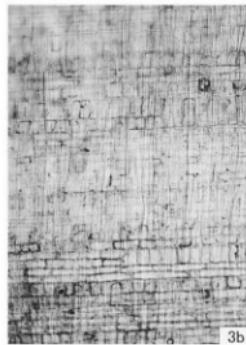
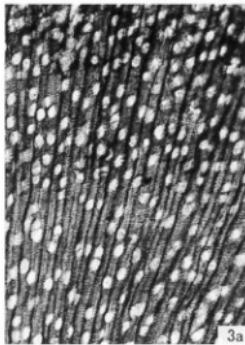
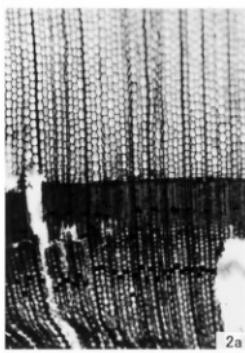
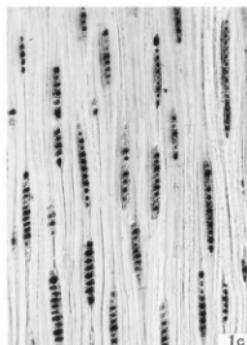
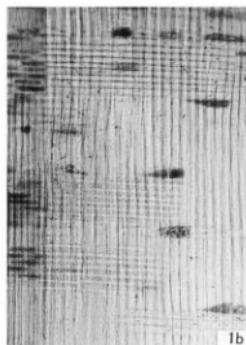
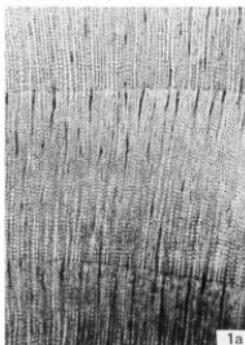


SK 21(表から)





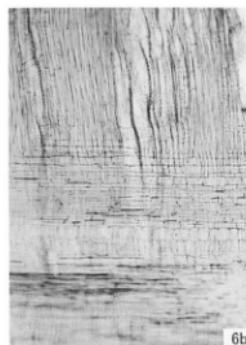
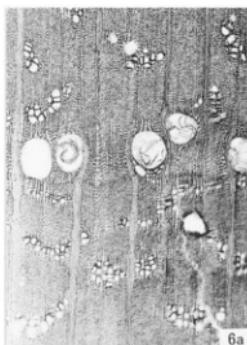
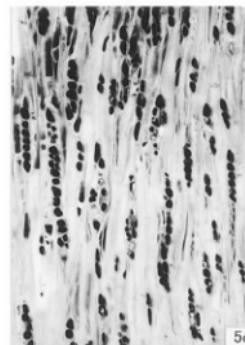
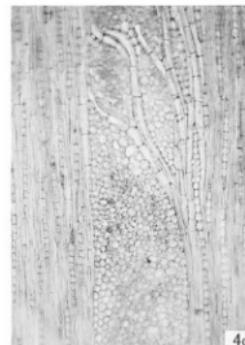
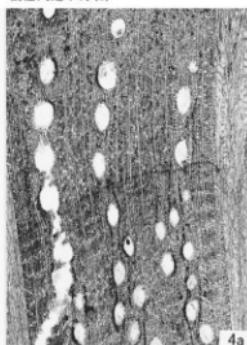
樹種同定木材(I)



1. モミ属(試料番号13)
 2. スギ(試料番号8)
 3. ヤナギ属(試料番号10)
- a:木口, b:径面, c:板目

— 200 μ m:a
— 200 μ m:b,c

樹種同定木材(2)



4. コナラ属アカガシ亜属(試料番号14)

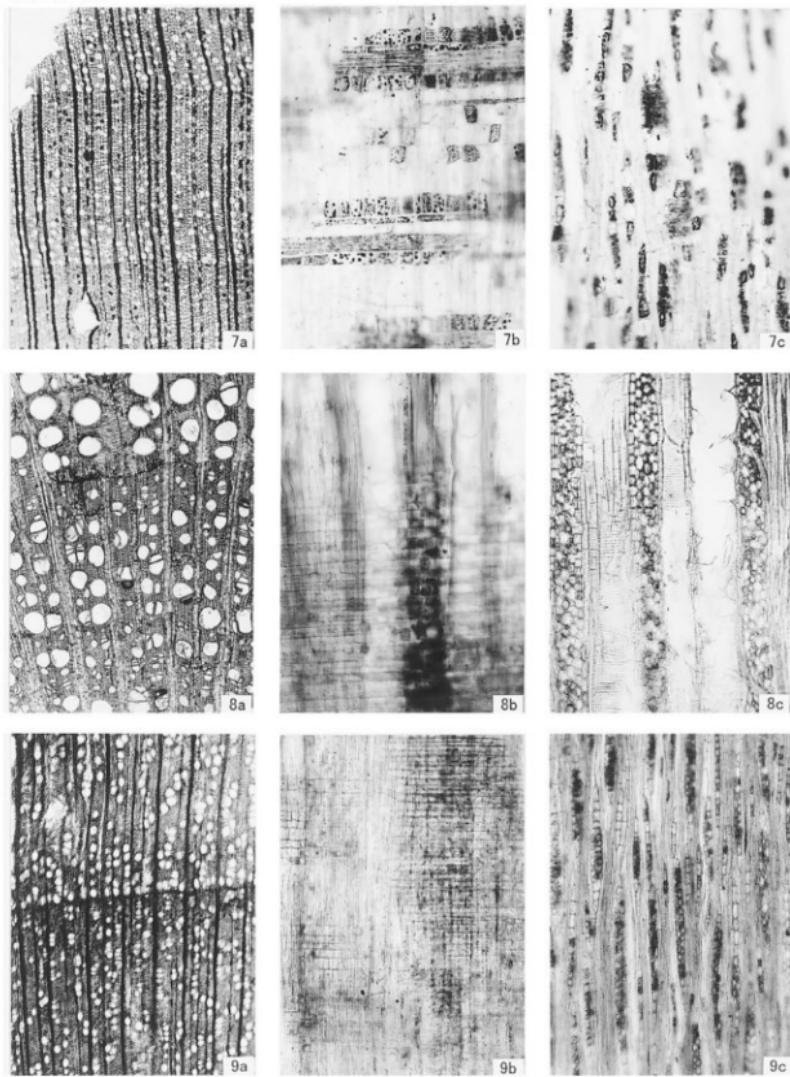
5. スダジイ(試料番号5)

6. エノキ属(試料番号9)

a:木口, b:柾目, c:板目

— 200 μ m —— 200 μ m b,c

樹種同定木材(3)



7. ヤブツバキ(試料番号1)

8. ツタ属(試料番号4)

9. イボタノキ属(試料番号11)

a:木口, b:柾目, c:板目

— 200 μ m

— 200 μ m.b.c

報 告 書 抄 錄

三重県埋蔵文化財調査報告書 115-25

- 船橋道23号の夢道路（102区）発掘調査に伴う
蔵田遺跡（第4次）発掘調査報告

2008（平成20）年2月

編集発行 三重県埋蔵文化財センター

印 刷 (有)山文印刷
